

名誉を重んじる人
「四幕」

サマセット・モーム 作

(田原 創 訳)

登場人物

バジル・ケント（二十六歳の非常にハンサムな法廷弁護士・作家）

ジェニー・ブッシュ（とてもかわいらしいバーの女給、普通よりは垢抜けている）

ジェイムズ・ブッシュ（ジェニーの兄、ジェニーより品がない、競売会社の社員）

ジョン・ハリウエル（メイベルの夫、二十六歳、ぶっきらぼうで開けっ広げ）

メイベル（ジョンの妻、ヒルダの妹、姉より小柄でかわいらしい、陽気だが無責任）

ヒルダ・マーレー（メイベルの姉、冷静で背の高い魅力的な上流婦人）

ロバート・ブラックリー（四十歳くらいの詩人、早口で軽佻浮薄な話し方をする）

グリッグス夫人（バジルの結婚前の下宿の女主人）

ファニー（バジルの結婚後のメード）

ヒルダの執事

時：現代（一九〇三年初演）

第一幕

ブルームズベリーにあるバジルの下宿の居間。

公会堂に面した壁に小さな鉄製のバルコニーのついた窓が二つあり、ロンドンの屋根屋根が望める。書類や本が散らかった書き物机が窓と窓の間の壁に寄せてある。下手にはドアがあり、廊下に通じている。上手には暖炉があり、左右に肘掛け椅子がある。炉棚の上に様々な喫煙具がある。本がいっぱいになった書棚がたくさんある。一方、壁にはデルフト焼きの皿が一、二枚、ロゼッティ風のエッチング、フラ・アンジェリコとボッティチェリの複製画が掛かっている。家具は地味で安いものだが、部屋の中に見苦しい物は何も無い。大量に本を読み、美しい物に喜びを感じる人の居場所である。

バジル・ケントが書き物机に足を載せながら上体をそらして椅子に座り、パイプをふかしながら本のページの縁を切り揃えている。二十六歳の非常にハンサムな男で、ひげはきれいに剃っており、上品な顔立ちで端正な目鼻立ちをしている。背広を着ている。

ドアにノックの音がする。

バジル どうぞ。

グレッグス夫人 お呼びですか？

バジル ええ。ご婦人がお茶に見えるはずです。帰りがけに買ってきたケーキがあります。

グレッグス夫人 承知しました。

グレッグス夫人は出て行くが、すぐにカップを二つ、砂糖、ミルクなどを載せたトレイを持って入って来る。

バジル ああ、グレッグス夫人、来週の今日でこの部屋を出たいんです。結婚する

予定でして。申し訳ないが出て行きます。あなたのお陰でとても快適でした。

グレッグス夫人 「仕方ないなという感じのため息をついて」まあ、仕方ありません。下宿人はそういうものです。殿方は結婚されますし、ご婦人方は多くありません。

呼び鈴が聞こえる。

バジル 呼び鈴が鳴っていますよ、グレッグス夫人。多分、僕が待っているご婦人

でしょう。もしほかの誰かが来たら、僕は留守ですから。

グレッグス夫人 承知しました。

グリッグス夫人は出て行き、バジルはしばらくの間もっぱら身の回りの物を整理する。グリッグス夫人がドアを開けて新来者を案内する。

グレッグス夫人 よろしいですか。

グリッグス夫人は再び出て行き、次の僅かなセリフの間にカップをもう二つとお茶を持って来る。

メイベルとヒルダが入って来る。ジョン・ハリウエルが続く。バジルは実に愛想よく客の方に向かって行くが、客が誰なのか気づいて途中で立ち止まる。かすかに当惑した表情が顔をよぎる。しかし、すぐに気を落ち着けて極めて愛想よくする。ヒルダ・マーレーは冷静で背の高い魅力的な女で、見事にガウンを着こなしている。メイベル・ハリウエルはヒルダの妹で、姉より小柄で美しいというよりもかわいらしく、陽気で実に口数が多くいささか責任感に欠けている。ジョンはバジルと同じ年で気さくであり、ハンサムでもないが醜くもなく、話し方はぶつきらぼうで開けっ広げである。

バジル 「握手しながら」こんにちは。

メイベル わたしたちに会えて嬉しいみたいね、ケントさん。

バジル 全くうっとりです。

ヒルダ あなたはわたしたちにお茶を飲みに来るよう誘いましたよね？

バジル 五十回も誘いました、やあ、ジョン！ 気がつかなかった。

ジョン 僕は控え目な夫だから、表に出ないでいるんです。

メイベル 自分を褒めてないで、わたしを褒めたらどうなの？ 世間の人はその方が

ずっと素敵だと思わ。

ジョン とんでもない、世間の人は、僕たちが二人だけの時、僕が君を叩いていると確信するよ。それに、君が表に出ないでいるなんて、僕は素直に言えなかったんだ。

ヒルダ 「バジルに向かって」あなたに不意打ちをかけたことをむしろ恥ずかしく思います。

バジル 僕の方が気が緩んでいただけです。本のページの縁を切り揃えていました。メイベル その方が読むよりずっと面白いわよね？ 「茶道具を見つけた。」あら、何て素敵なケーキなこと——それに、カップが二つも！ 「不思議に思っバジルを見る。」

バジル 「ちよつとぎこちなく」ああ——誰かがひよっこりやって来る場合に備えて、いつも余分のカップを置いてあるんです。

メイベル 何て他人思いなの！ それと、いつもそんな高いケーキを食べるの？
ヒルダ 「にっこりしながら諫めて」メイベルったら！

メイベル あら、でも、そのケーキはよく知ってるし、大好きなの。陸海軍デパートで二シリングするんだけど、わたしにはとても買えないわ。

ジョン どうして僕たちが来たか、君から説明してもらいたいな。さもないと、バジルが僕のせいだと思うだろ。

メイベル 「無頓着に」結婚してからずっと思い出そうとしていたんだけど。あなたが言っつてよ、ヒルダ。口実をでっちあげたのはあなたなんだから。

ヒルダ 「笑って」メイベル、もう二度とあなたを連れ出さないわ。この人たちつたら、本当に手に負えないのよ、ケントさん。

バジル 「ジョンとメイベルに向かって、ほほえみながら」どうして君たち二人が来たのか分からない。マーレー夫人はずっとお茶に来る約束をしてくれてたけど。

メイベル 「気を悪くしたふりをしながら」だとしても、わたしたちが来てすぐわたしを追い払わなくてもいいでしょ。それに、あのケーキをいただくまで、わたしは帰りませんから。

バジル おや、お茶がきた！ 「バジルが話している時にグリッグス夫人がお茶を持って来る。バジルはヒルダの方を振り向く。」お茶を注いでいただけませんか。わたしは不器用なもので。
ヒルダ 「バジルに優しくほほえみかけて」喜んで。

ヒルダはお茶を注ぐのを続け、会話が進む間にバジルはメイベルにお茶とケーキを手渡す。

ジョン 二人以上の女性が一時に独身男性の部屋を訪れるのはよろしくないと僕は言ったんですよ、バジル。

バジル 君が教えておいてくれたら、もう少しちゃんとしてただけけど。

メイベル あら、そんなこと望んでないわ。わたしたちは人前ではなく家にいるセブルが見たかったのよ。

バジル 「皮肉っぽく」随分お世辞が上手ですね。

メイベル とところで、本の方はどうなの？

バジル うまくいってますよ、ありがとう。

メイベル どうなっているのか、いつも聞き忘れるの。

バジル とんでもない、あなたはご親切にも質問していただく機会を決して逃がしませんね。

メイベル あなたはまだ一言だっけ書いていないと思うわ。

ヒルダ そんな馬鹿な、メイベル。わたしは読んだことがありますよ。

メイベル まあ、でも、あなたは恐ろしく思慮分別があるものね……。それなら、あなたの勲章が見たいわ、ケントさん。

バジル 「ほほえみながら」何の勲章ですか？

メイベル 恥ずかしそうなふりはしないで！ 喜望峰に行ってもらった勲章のことよ。
バジル 「引き出しから勲章を取り出すと、にっこりしてメイベルに手渡す。」本
当に見たいのなら、これですよ。

メイベル 「一つを手に取りながら」これは何？

バジル ああ、それは南アフリカのごく普通の勲章ですよ。

メイベル それで、もう一つのは？

バジル それは「殊勲賞」です。

メイベル どうして「殊功勲章」がもらえなかったの？

バジル ああ、僕はただの騎兵隊兵士でしたからね。「殊功勲章」がもらえるのは
将校だけです。

メイベル それで、何をやってこれをもらったの？

バジル 「ほほえみながら」すっかり忘れてしまいました。

ヒルダ それは戦場での功労に対して与えられるものなのよ、メイベル。
メイベル 知ってたわ。ケントさんが謙虚なのか自惚れが強いのか見たかっただけな
の。

バジル 「にっこりして、メイベルから勲章を取って片づけながら」何て意地悪な
んだ！

メイベル ジョン、どうしてあなたは喜望峰に行つて英雄的なことをやらなかった
の？

ジョン 僕は英雄的なことをイギリス諸島に限定したんだ。君と結婚しただろ。

メイベル それっておかしいことなの、それともみつともないことなの？

バジル 「笑いながら」もう聞きたいことはありませんか、ハリウェル夫人？

メイベル あるわ、どうしてあなたが階段を六つも上がった所に住んでいるのか知り
たいの。

バジル 「面白がつて」眺めがいいからですよ、ただ単に。

メイベル でも、ほら、何も見えないわ。煙突の通風管ばかりよ。

バジル でも、とても美しい通風管です。来てご覧になつてください、マーレー夫
人。「バジルとヒルダは一つの窓に近寄つて開ける。」それに、夜になる
とすごく神秘的です。ちようど屋根の上で戯れる悪戯好きの不思議な妖精
みたいに見えます。日が沈むのがどんなに素敵か想像できないでしょ。た
まにですが、雨が上がった後は、スレートの屋根が磨いた純金みたいにび
かぴか光るんです。「ヒルダに向かつて」よく思うんですが、この眺めが
なかったら、僕は生きていけないでしょう。僕にとってはそれだけ素晴ら
しい物だということです。「メイベルの方を振り向きながら、陽気に」笑
つてやつてください、ハリウェル夫人、僕は感傷的になりかけています。
今のはあなたがとっさにでつちあげたのかしら、それとも古いノートから
引つ張り出してきたのかしらと思つていたのよ。

ヒルダ 「バジルを見て」外に出てもいいかしら？

バジル ええ、いらつしやい。

ヒルダとバジルがバルコニーへ踏み出るとすぐ、ジョンはメイベルのところに行き、知らぬ間にキスしようとする。

メイベル 「跳び上がりながら」あっちへ行つて、ぞつとするわ！
ジョン 馬鹿なこと言うもんじゃやない。僕はしたい時にキスするよ。

ジョンが追い回す間、メイベルは笑いながらソファアの回りを歩き回る。

メイベル あなたにはもつと真面目に人生を考えてもらいたいわ。
ジョン 君にはそんな目立つ帽子を被らないでもらいたいね。

メイベル 「ジョンがメイベルの腰に腕を回すと」ジョン、誰かに見られるわ。
ジョン メイベル、命令だ、キスさせろ。

メイベル いくらくれる？
ジョン 六ペンス。

メイベル 「ジョンからすり抜けながら」ニシリング六ペンス以下じゃできないわ。

ジョン 「笑いながら」ニシリング上げよう。

メイベル 「うまいこと巻き上げようと」ニシリング三ペンスにして。

ジョンはメイベルにキスする。

ジョン もうこつちへ来ておとなしく座るんだ。

メイベル 「ジョンの側に座りながら」ジョン、抱いちや駄目よ。あの二人が入つて来たたら、変に思われるから。

ジョン だって、僕は君の夫だよ。

メイベル ただそれだけのことよ。もしわたしを抱きたかったら、ほかの人と結婚するべきだったわ。「ジョンはメイベルの腰に腕を回す。」ジョン、やめて、きつとあの二人が入つて来るわ。

ジョン そうなつても、僕は構わないよ。

メイベル 「ため息をつきながら」ジョン、わたしを愛してる？

ジョン うん。

メイベル ほかの人を好きになつたりしない？

ジョン うん。

メイベル 「同じ口調で」きつきのニシリング三ペンスくれるわよね？

ジョン メイベル、ニシリングだけだったよ。

メイベル まあ、騙したのね！

ジョン 「立ち上がりながら」バルコニーに出てみるよ。僕は煙突の通風管を熱烈に愛しているからね。

メイベル 駄目よ、ジョン、あなたが必要な。

ジョン どうして？

メイベル 今すぐわたしの足に飛びかかってもらうためにあなたが必要だと言うだけじゃ不十分かしら？

ジョン ああ、かわいそうに、君は二分でも僕がいないと差し支えがあるの？

メイベル 今、あなたは人の弱みにつけ込もうとしている。わたしがあなたを必要とするのは、特にこの二分間だけなの。こっちへ来て、かわいい坊やらしくわたしの側に座ってちょうだい。

ジョン 今、君はやっつてはいけけないどんなことをやっていたの？

メイベル 「笑いながら」何にも。でも、わたしのためにやってほしいことがあるの。ほら、やっぱりね！ そうだと思った。

メイベル 靴の紐を結ぶだけよ。「足を差し出す。」

ジョン それだけ——きつとだね？

メイベル 「笑いながら」そうよ。「ジョンはひざまずく」

ジョン でも、お嬢ちゃん、解けてないよ。

メイベル それなら、坊や、解いてからまた結んでよ。

ジョン 「やり始めながら」メイベル、僕たちはあの二人の邪魔なんじゃない——年甲斐もなく？

メイベル 「皮肉っぽく」まあ、お利口さんだこと！ 愛が羽を貸さなかったら、ヒルダが六つも階段を上がると思う？

ジョン 愛が付添人にも羽を用意してくれたらいいんだけど。

メイベル 不真面目なこと言わないで。真面目な話なんだから。

ジョン お嬢ちゃん、結婚して六か月しか経ってないのに、僕に厳格な父親を演じるのを期待するのは実際無理だよ。ほとんど間違ってるだろ。

メイベル ひどいこと言わないで、ジョン。

ジョン ひどくなんかないよ、当然の話さ。

メイベル 「澄ました顔をして」そんなこと教わってないわ。若い娘が知って気分のいい考えじゃないもの。

ジョン ヒルダがバジルのこと好きだって、どうして僕に言わなかったの？ バジルもヒルダが好きなの？

メイベル 分からないわ。それこそ正にヒルダがバジルに聞こうとしていることだと思うの。

ジョン メイベル、君は、お姉さんが僕の友達にプロポーズするようになって、人畜無害の僕をここに連れて来たって言うのかい？ そんなの侮辱だよ。

メイベル ヒルダはそんなことしてないわ。

ジョン 君が怒って見せる必要はないよ。君が僕にプロポーズしたことは否定できないんだから。

メイベル できるわ、本当なんだから。もしわたしからプロポーズしていたら、あんなに途方もなく長い時間はかからなかったでしょうに。

ジョン どうしてヒルダは貧しいバジルと結婚したいんだろうか！

メイベル それは、キャプテン・マーレーがヒルダに年五千遺したし、ヒルダはバジル・ケントが天才だと思っっているからよ。

ジョン リージェンツ・パークとかベイズウォーターの客間にいるのは大したことのない天才ばかりさ。バジル・ケントがなかなか賢いと言える以上のものなのか、僕には分からないけど。

メイベル ちつて、恐ろしく気難しいし、いつだってほかの人の奥さんに言い寄るんだから。

ジョン ヒルダはずっと文学に通じた人たちが好きだった。一番まずいのは騎兵なんかと結婚することだ。頭脳を重要視することになるからね。

メイベル そうだけど、ヒルダがそういう人と結婚する必要はないわ。バジルを励ましたいなら、陰ながらそうすればいいのよ。才能は常にパンと水と精神的な愛情で最もよく育つんだから。ヒルダがバジルと結婚したら、バジルは太って見苦しくなって、頭が禿げて馬鹿になるだけだわ。

ジョン まあ、そうなったら、バジルは理想的な代議士になるだろうね。

バジルとヒルダが部屋に戻って来る。

メイベル 「意地悪く」それで、二人で何の話をしていたの？

ヒルダ 「機嫌悪く」世間話よ、シェイクスピアとかグラスハーモニカのね。

メイベル 「眉を吊り上げて」まあ！

ヒルダ もう大分遅くなったわね、メイベル。本当にもう帰らなければ。

メイベル 「立ち上がりながら」それに、わたしは少なくとも十二軒訪問しなければならぬ。みんな留守だといんだけど。

ヒルダ 腹立たしいことに、訪問すると決まってみないのよね。

メイベル 「バジルに手を差し出しながら」さようなら。

ヒルダ 「冷静に」どうもありがとう、ケントさん。すっかりお邪魔してしまったみたいね。

バジル 「ヒルダと握手しながら」お会いできて素敵でした。さようなら。

メイベル 「陽気に」あなたがイタリアに行く前にまた会えますよね？

バジル いや、もうイタリアには行きません。計画がすっかり変わりました。

メイベル 「ジョンを見ながら」まあ！ では、さようなら。あなたは帰らないの、ジョン？

ジョン うん。このままバジルとちよつと話しをしようと思うんだ。君が義務を果たしている間にね。

メイベル でも、早く帰るようにしてね。うんざりする人たちを夕食に呼んでいるんだから。

ヒルダ 「にっこりして」気の毒な人たち！ 誰なの？

メイベル 誰だったか忘れたわ。でも、嫌でたまらない人たちだというのは分かっているの。だから呼んだのよ。

バジルがドアを開けると、女二人は出て行く。

ジョン 「座って手足を伸ばしながら」もう女どもは追い払ったんだから、楽にしようよ。「ポケットからパイプを取り出しながら」君のタバコを回してくれたら、試してみようと思うんだけど。

バジル 「ジョンに瓶を手渡しながら」君が残ってくれてすごく嬉しいよ、ジョン。話しがしたかったんだ。
ジョン ほら！ やっぱりだ！

バジルが一瞬間を置く間、ジョンは面白そうにバジルを見る。ジョンはパイプにタバコを詰める。

ジョン 「パイプに火を点けながら」素敵な女だ、ヒルダは——そうだろ？
バジル 「熱っぽく」ああ、実に魅力的だ……。でも、どうしてそんなことを言うんだ？

ジョン 「知らない風に」さあね。ふと、そう思ったんだ。
バジル あのね、話があるんだよ、ジョン。
ジョン えっ、そんなに深刻にならないでくれよ。

バジル 「ほほえみながら」深刻な話なんだ。
ジョン いや、そんなことはない。僕自身はもう済ませたよ。高飛び込みみたいなものだ。水面を見下ろした時はほとんど息が止まりそうになるけど、やってしまえば——思ってたほどひどくないものさ。君は結婚するつもりなんだろ。

バジル 「にっこりして」一体どうして分かるんだ？
ジョン 「陽気に」自分のこの目で見たからね。おめでとう。賛成だよ。僕はその女性を花婿に引き渡す時に着る新しいフロックコートを買うつもりだ。

バジル 君が……。？「突然悟って」君は方向を間違えている。僕が結婚するのは君の義理のお姉さんじゃないんだ。
ジョン それなら、一体どうしてそうだと聞いたんだ？
バジル その人の名前には触れなかっただろ。

ジョン ふーん、僕はただの笑い者どころではなくなってしまったみたいだね？
バジル 一体どうしてそう思ったんだ……。？
ジョン 「遮りながら」ああ、僕の妻の馬鹿な考えに過ぎない。女はその程度の馬鹿なんだよね。自分がすごく鋭いと思ってるんだから。

バジル 「不安になって——ジョンを見ながら」マレー夫人もそうかな……。？
ジョン いや、もちろん、違うよ！ ところで、一体誰と結婚するつもりなんだ？
バジル 「顔を赤らめて」ミス・ジェニー・ブッシュと結婚するつもりだ。

ジョン 聞いたことないな。僕の知ってる人か？
バジル ああ、知ってるよ。

ジョン 「記憶を辿りながら」ブツシュ……、ブツシュ……。[「にっこりして」唯
一聞き覚えのあるジェニー・ブツシュといえば、フリート街の小柄ですご
くかわいいバーの女給だ。彼女と結婚するつもりじゃないだろうね。

ジョンは、これがバジルが結婚するつもり的人物と関係があるとは
少しも思わず、極めてさり気なく言う。すると、バジルが返事をし
ないので、ジョンはバジルを鋭い目つきで見る。沈黙があつて、そ
の間二人の男は互いに見つめ合う。

ジョン バジル、それは君が喜望峰に出て行く前に僕たちが知っていた女じゃない
ね？

バジル 「顔が青ざめて緊張しているが断固として」僕が言ったばかりだ、君はジ
エニーを知っていたって。

ジョン 冗談だろ、君は「ゴールデン・クラウン」の女給と結婚するつもりじゃな
いよな？

バジル 「ジョンをじつと見ながら」ジェニーは「ゴールデン・クラウン」の女給
ではあつた。

ジョン でも、何てことだ、バジル、どういうつもりだ？ 本気じゃないよな？

バジル 本気だ！ 僕たちは来週の今日、結婚するつもりだ。

ジョン 君は完全に気が狂つたのか？ 一体どうしてジェニー・ブツシュと結婚し
たいんだ？

バジル 随分きわどい質問だね？ [「にっこりして」彼女に恋しているからじゃない
かな。

ジョン 全く、つまらない答えだ。

バジル 極めて分かりやすいだろ。

ジョン 馬鹿な！ そりゃ、僕だつて十二人の娘に恋したけど、全部とは結婚しな
かつた。重婚罪が七年の刑になるような国でそんなことはできないからね。
バーンズからタプロウまでテムズ川沿いのどのハブも僕の青春時代の報
いられない情熱の墓碑だ。僕は彼女たちを心から愛したけど、結婚してく
れとは決して言わなかつた。

バジル 「唇を引き締めながら」ふざけないでくれ、ジョン。

ジョン 笑い者にならない自信があるのか？ 君が困つたことになっているのなら、
僕たちで助けてやることはできる。結婚は絞首刑みたいなもので、もうど
うしようもない時の解決策だ。

バジルは腰を下ろしながら不機嫌そうに肩をすくめる。ジョンはバ
ジルに近寄って行き、バジルの肩に両手を置きながら目をのぞき込
む。

ジョン どうして彼女と結婚するんだ、バジル？

バジル 「苛立たしげにずっと立ち上がりながら」くそっ、どうして放っておいてくれないんだ？

ジョン 馬鹿なまねはよせ、バジル。

バジル 僕が自分の選んだ人と結婚しちゃいけないのか？ 君には何でもないだろ？ 彼女がバーの女給かどうかなんて、僕が気にしているとも思うのか？

バジルが興奮して行ったり来たりする間、ジョンはバジルをじっと見つめる。

ジョン バジル、なあ、僕たちが知り合ってからもう随分経つ。僕を信じた方がいいとは思わないか？

バジル 「歯を食いしばりながら」君は何が知りたいんだ？

ジョン どうして彼女と結婚するんだ？

バジル 「激しい口調でぶっきらぼうに」そうしなければならぬからさ。

ジョン 「静かにうなずきながら」分かった。

沈黙がある。バジルがジョンの方をより静かに振り向く。

バジル ジェニーを覚えているか？

ジョン ああ、憶えているどころじゃない。そりゃ、昔、僕たちはいつもあそこで昼飯を食べたからね。

バジル 実は、喜望峰から戻った後、またあそこに行き始めたんだ。僕があつちに行っている時、彼女は僕に手紙をくれる気になってね。かなり綴りの間違ったおかしなものだったけど——彼女が僕のことを思っていることに感動したんだ。それに、刻みタバコと紙巻きタバコを送ってくれた。

ジョン 僕の未婚のおばが毛糸のマフラーを君に送ったけど、お返しに君が結婚の申し込みをしたなんて気づかなかった。

バジル そして、あれやこれやで、僕はジェニーのことをかなりよく知るようになった。彼女も僕のことを随分好きになったみたいで——僕もそれを悟らない訳にはなかった。

ジョン でも、ずっと彼女はバーの回りをぶらついては数えきれないくらい何杯もハイボールを注文して色目を使うあの入れ歯のチビと婚約しているふりをしていた。

バジル 彼女が非番の夜、僕が彼女を連れ出したものだから、彼が大騒ぎして、彼女は仕事を店を辞めたんだ。僕のせいだと思わざるを得なかった。

ジョン それで、その後は？

バジル その後は、彼女を芝居に連れて行ったり、何やかやするのが習慣になった。

ジョン そして、とうとう……！

ジョン それがどれだけ続いたんだ？

バジル 数か月だ。
ジョン で、それから？

バジル それが、先日彼女が僕に電報を寄こしたんだ。彼女がとんでもない状況だと分かった。彼女は目が腫れるほどひたすら泣いていた、かわいそうに。気分が悪くて医者に行つたんだけど。医者が言うには……。

ジョン 本当は君もあらかじめ分かつていてもよさそうなものだ。

バジル ああ……。彼女はすっかりヒステリックになつていた。どうしたらいいのか、どこへ行つたらいいのか分からないと言つていた。それに、自分の身

内なことまでひどく落ち込んでいた。自殺したいと言つていた。

ジョン 「冷淡に」彼女がすっかり気が動転したのも当然だ。

バジル 唯一僕にできることは、彼女に結婚を申し込むことだと思つた。そして、彼女の涙に濡れた哀れな顔に喜びの表情が浮かんだ時、僕は正しいことをしたと思つた。

間がある。ジョンは行つたり来たりしてから、突然止まつてバジルの方を振り向く。

ジョン 儉約なんかする必要のなかつた君が、一シリング使う度に気をつけなければならなくなることを考えたのか？ 君はずっと金に無頓着で、もらったものは惜しげもなくばらまいてきたんだぞ。

バジル 「肩をすくめながら」僕は、たくさんの役に立たない贅沢品なしで済ますことよりもひどいことに甘んじる必要がなければ、本当に不満を言う必要はないと思つている。

ジョン でも、君に妻と生まれてくる子供を養う余裕はないはずだ。

バジル 僕にだつてほかの連中と同じように金を稼ぐことはできると思うよ。

ジョン 本を書くことですか？

バジル 生活費を稼ぐためにバーで仕事を始めるつもりだ。今まで、僕は心配したことなんかないよ。

ジョン 君ほどバーの退屈な給仕や骨折り仕事に向いていない奴は知らないけど。今に分かるよ。

バジル それに、君の結婚に対して友達が何て言うと思う——バーの女給との？

ジョン 「軽蔑して」友達のことなんか、ちつとも気にならないよ。

バジル 友達にとつては愉快な話だ。いいかい、果てしない数の男女が社交界を無視して笑うようになり、しばらくは社交界をやつつけたと思つていた。でも、ずっと社交界は黙つてほくそえんでいて、突然鉄の手を出した——そして、彼らをぐしゃぐしゃにしたんだ。

バジル 「肩をすくめながら」僕を無視する俗物がないことはないというだけのことだろ。

ジョン 君をじゃない——君の妻をだ。

バジル 僕は自分の妻を連れて行ってはいけない家に行くほど育ちの悪い男じゃない。

ジョン でも、君はこの世でこういうことを諦める最後の人間だ。晩餐会に行ったり田舎屋敷に泊まったりすることほど君が楽しめるものはない。女性のほほえみは呼吸するみたいに君の生きている証しだ。

バジル 君はまるで僕が飼いならされた猫であるみたいに話すね。自慢じゃないが、ジョン、僕はこの世に自分にふさわしいことがあることを証明した。僕が喜望峰に行ったのは、それが義務だと思ったからだ。ジェニーと結婚するのも同じ理由だ。

ジョン 「真剣に」一つ、質問に答えてくれるかな——君の名誉にかけて？
バジル いいとも。

君は彼女を愛しているのか？

バジル 「間を置いて」いいや。
ジョン 「激して」それなら、絶対、君に彼女と結婚する権利はない。男に哀れみで女と結婚する権利はない。そんなことするのは残酷なことだ。君自身と彼女がひたすらみじめなことになって終わるに決まっている。

あのかわいそうな娘を悲しませることはできない。

バジル 君は結婚がどういうものか分かっていない。互いに熱愛し合い、同じ興味を持って同じ階級に属している二人の人間にとってさえ、結婚は時としてほとんど耐えがたいものだ。情熱のせいで完全に避けられないものにならない限り、結婚はこの世で最も恐ろしいものだ。

僕の結婚は完全に避けられないものだ——もう一つの理由でね。

バジル 君の話しぶりだと、まるでそんなことは今まで一度もなかったみたいだね。
バジル ああ、そうだね、でも、毎日あることだ。男には関係ないがね。そして、娘はどうかと言え、その理由で川に身を投げる。破滅してくだばるんだ。馬鹿な。娘は養ってもらえる。ちよつとした思慮分別が必要なだけだ——ちよつとでも気づく人はいないだろうし、娘だって少しも悪くならないだろう。

でも、それは人に知られるという問題ではない。名誉の問題だ。

バジル 「目を見開きながら」それで、正確に言っただけに名誉が入って来たんだ、
ジョン いつ君が……？

まあ、僕はほかの男と同じ男だ。ほかの男にあるように、僕にも情熱はある。

ジョン なあバジル、僕はあえて君を裁くつもりはない。でも、道徳主義者を気取るにはちよつとばかり遅すぎると思う。

バジル 君は、僕が自分のやったことを後悔してないと思うか？ 後になってから抵抗したって言うのは簡単だ。もし僕たちがみんな夜も翌朝と同じくらい分別があったら、世の中は日曜学校になるだろう。

ジョン 「頭を振りながら」結局、君の若さと——純潔さを欠いたことが原因の非常に残念な事件だというだけのことだ。

バジル 「熱っぽく真剣に」僕は野良犬のように振る舞ったかもしれない。分らない。ほかのどの男だって同じだろうと思ってる。でも、今は、目の前にはつきりした義務があつて、絶対、それを果たすつもりだ。

ジョン 人生は一度きりで、失敗は取り返しがつかないことが分らないのか？世間の人は人生をもてあそんでいる。人生がまるであの手この手を試すことが出来るチェスのゲームであるかのようにね。そして、何がなんだか分からなくなると、チェス盤をすっかり払ってまた始めるんだ。

バジル でも、人生はチェスのゲームだけど、そこで人は決まって負ける。死がチェス盤の反対側に座っていて、一手ごとに対抗手段を講じる。そして、秘かに巧みに企んだことすべてを巧みにかわすんだ。

ジョン でも、最後には必ず死に王手詰めにされるとしても、きっとその勝負はやるだけの価値がある。最初から馬鹿馬鹿しいドンキホーテ的な考えで自分ハンデイをつけるのはよせ。人生は豊かだ。人生から提供されるものがたくさんあるというのに、君は骨折り甲斐のある機会をほとんどすべて棒に振ろうとしているんだ。

バジル 「深刻に」僕が結婚しなかったら、ジェニーは自殺するだろう。

ジョン 君だって彼女がそんなことするなんて本気で思っていないんだ。だって、世間の人は簡単に自殺なんかしないからね。

バジル 君はたくさんのことを考えてくれたけど、ジョン——子供のことは考えてくれない。僕は子供に泥棒みたいにこそそ世間に入って来させることはできない。公然と合法的に入って来させる。そして、ちゃんとした名前を持って世間を渡っていかせる。一生いまわしい汚名で足かせをかけたとしても、世間は十分ひどいものだからね。

ジョン あのなあ、バジル……。

バジル 「遮って」君はいくらでも反論を持ち出せるだろうが、この状況では、何物も名誉を重んじる人間に開かれている道は一つしかないという事実は変えられないんだ。

ジョン 「皮肉っぽく」だとしても、その道は君の心にとっては名誉になるかもしれないが、君の理解力にとってはほとんど名誉にならないね。

バジル 君なら僕が唯一できることをやろうとしていることをすぐに分かってくれるだろうと思つたんだが。

ジョン なあバジル、君は「哀れみ」と言った、そして「義務」とも言ったけど、そこに虚栄心以上のものがあると間違ひなく信じているのか？ 君は自分を一種の道徳的頂点に置いたんだ。自分自身の英雄的行為を少しも称賛しすぎていないのは確かか？

バジル 「愛想よくにっこりして」君の眼には英雄的行為がそれくらいささいなこと映るのか？

ジョン 「苛立って」でも、ねえ君、二流のものに満足する世界で実現不可能な理想に従って行動するのは馬鹿げている。君はアフリカの野蛮人に銀行紙幣を支払っているが、彼らの間ではタカラガイの貝殻が国内通貨なんだ。

バジル 「ほほえみながら」僕には君の言ってることが分からない。

ジョン 社会は独自の戒律、一つの掟を作っていて、それは大して立派でもなくそ

れほど悪人でもない二流の人々にびったりなんだよ。でも、人の行動がその理想より高くても低くても、同じように社会はその人を罰するんだ。

バジル たまに、死ぬと崇拜の対象になることがあるね。

ジョン でも、生きている時は、大層うまく注意を払って磔にするんだ。

ドアにノックの音がして、グリッグス夫人が入って来る。

グリッグス夫人 またお客様です。

バジル 入ってもらってください。「ジョンに向かって」ジェニーだ。お茶に来ると言っていた。

ジョン 「にっこりして」ああ、あのケーキは彼女のためだったんだね？ 僕は帰った方がいいかな？

バジル 君が帰りたいのでなければ、帰らないでくれ。僕が恥ずかしいととても思うのか？

ジョン とにかく君の話聞いて、僕が彼女に会うのを君は好まないかもしれないと思っていたんだ。

ジェニー・ブッシュと兄のジェイムズが入って来る。ジェニーは優しく魅力のある顔立ちで美しい顔色していてとてもかわいらしい。金髪が豊かで、非常に念入りに整えられている。小ぎれいというより、むしろ派手な服装をしている。バーの女給とか喫茶店のウェイトレスによくあるタイプだが、恐らく普通より垢抜けしている。物腰にあたりさわりはないが、上流婦人ものではない。ジェイムズはきれいにひげを剃った鋭い顔つきの青年である。騎手のように着飾り過ぎていて、明らかに妹より品がない。ロンドン訛りの英語を話し、必ずという訳ではないが、時々まHを省略して発音する。過剰に誠意がこもっていて、過剰に愛想がよい。

ジェニー 「バジルに近寄りながら」すごく遅くなっちゃって、早く来れなかったものだから。

ジェイムズ 「おどけて」俺のことは気にするな。彼にキスしろよ、ほら。

ジェニー そうだった、あんたに合わせるために兄のジミーを連れて来たの。

バジル 「握手しながら」初めまして。

ジェイムズ ご丁寧に、どうも。知り合いになれて嬉しいよ。

ジョン 「ジョンを見て、突然いることに気がつき」あらまあ、気づかないところだったわ！ これが昔のジョン・ハリウエルでなかったら。あんたに会えるなんて思ってもみなかった。思いも寄らなかったけど嬉しいわ。

ジョン お久しぶり。

ジェニー　ここで何をしているの？
ジョン　バジルとお茶を飲んでいたんだ。
ジェニー　「茶器を見ながら」あんたはいつも一度に三つのカップで飲むの？
ジョン　僕の妻が来てたんだ——妻の姉もね。
ジェニー　あら、そうなんだ。あんたが結婚するなんて。結婚生活はどうなの？
ジョン　うまくいってるよ、どうもね。

バジルがお茶を一杯注ぎ、次のセリフの間、ジェニーにミルクとシユガーとケーキを渡す。

ジェイムズ　結婚生活には少しばかり慣れが必要だと世間では言われてるな。

ジョン　ブッシュさん、あなたは哲学者だ。

ジェイムズ　それなら、俺はこう言い返すよ。あんたは朝早く起きてでも俺の不意を突くんだろうってね。あんたの名前を聞き損ったな。

ジョン　ハリウエルです。

ジェイムズ　アリウエルだって？

ジョン　「Hを強調しながら」ハリウエルですよ。

ジェイムズ　俺もそう言ったんだ——アリウエルってね。アリウエルっていう食肉業の奴を知ってる。関係あるのか？

ジョン　関係ないと思います。

ジェイムズ　奴も商売はうまくいったね。食肉からめったにないくらいたくさん金が生み出されるんだ。

ジョン　そうでしょうね。

ジェニー　「ジョンに向かって」あんたに会っていた頃から随分経つわ。もう結婚したんだから、おとなしくなったでしょうね。独身だった頃はさかりがついて野蠻だったけど。

ジェイムズ　「おどけて」彼が赤面するようなことを言うもんじゃないよ、ジェニー。

どんなに節度のある家庭でも事故は起こるものさ。それに、聖書にもあるように、男はいつになっても少年なんだから。

ジョン　僕は失礼しなければならぬ、バジル。

ジェイムズ　それじゃ、俺もそろそろ失礼しよう。将来の義理の弟にちよつと挨拶をするために寄っただけなんだ。俺は誠実でいたい人間なんでね。俺には傲慢なところなんかないからな。

バジル　「丁重だが気持ちをごめずに」まあ、お茶でも飲んでいきませんか？

ジェイムズ　いや、結構。俺はお茶があまり得意じゃなくてね。そういうのは女どもに任せてる。俺自身はもつと強いのが好きなんだ。

ジェニー　「いさめて」ジミーったら！

バジル　ウイスキーがありますよ、ブッシュさん。

ジェイムズ　おっと、「ブッシュ」もやめ、「さん」付けもやめ。「ジミー」と呼んでくれ。ご大層なのはたまらない。俺の見方はこうだ。俺たちは二人とも

紳士だ。そこで、いいか、俺は自画自賛する人間じゃない。でも、俺はこう言いたい。俺は紳士だ。これは自画自賛じゃないだろ？

ジョン いやいや、まさか。単に事実を述べただけです。

ジェイムズ それで、俺が言ったように、俺は自分が紳士だと知っている。それほどうしようもないことだから、それを自慢して何になるんだ？ 俺がパブで誰かに行くわして一杯やれよと勧められても、そいつが貴族かどうかなんて尋ねないね。

バジル その一杯をいただくだけのことですね。

ジェイムズ でも、あんただって同じことをするだろ？

バジル そうでしょうね。ところで、今は一杯やりますか？

ジェイムズ そりゃありがたいけど、婚約することがどういいうことか、俺は分かっている。あんたたちカナリヤの邪魔はしたくない。俺とアリウエルは近所いうがい葉でも飲みに行くよ。手頃なパブがあるんだ。「ジョンに向かって」あんたも時々あそこに行かないこともないだろ？

ジェニー 「笑って」彼は年がら年中「ゴールデン・クラウン」にやって来てたから、やってみて！

ジョン 残念ですが、すごく急いでいるもんで。

ジェイムズ いまいましいこった、この人生でスコッチの一滴ぐらいやる時間はいつだってあるだろうに。

バジル 「ジェイムズに向かって、箱を手渡しながら」それじゃ、葉巻を持って行ってください。

ジェイムズ 「一本取って確かめながら」そんなに言うんなら。「ヴイラーリ・ヴイラー」だ……。百本でいくらするんだ？

バジル もらったんで、いくらするか本当に知らないんです。「マッチを擦る。」ラベルは取らないんですか？

ジェイムズ そんなことするものか。「ヴイラーリ・ヴイラー」を毎日吸ってる訳じゃないが、吸う時はラベルをつけたままだ。

ジェニー 「笑いながら」ジミーったら、兄さんにはびっくりだわ！

ジョン 「ジェニーと握手しながら」さようなら——お幸せに。

ジェニー ありがとう。「ゴールデン・クラウン」であたしがあんたにカクテルを作っていた頃は、あたしがバジルと結婚するなんて思ってもみなかったですよ？

ジェイムズ さあ、アリウエル。無駄話はその辺でやめておけ。カナリヤたちの邪魔になるだけだ。じゃあ、お前、またな。バイバイ、バジル。

バジル さようなら——ジミー。

ジョン・ハリウエルとジェイムズは出て行き、ジェニーは衝動的にバジルに近寄って行く。

ジェニー キスして。「バジルは微笑みながらジェニーにキスする。」ほら！ やつと静かに座って話せるわ。あたしの兄はどう？

バジル ああ——到底まだ分からない。随分愛想よさそうだね。

ジェニー よく知れば悪い人じゃないわ。母にそっくりなの。

バジル 「眉を吊り上げながら」そうなの？ それで——お父さんもあんなふうなの？

ジェニー それは、あのね、パパはジミーが受けた教育は受けてないわ。ジミーはマ—ゲイトの寄宿学校に行ってたの。

バジル そうなの？

ジェニー あんたも寄宿学校に行ってたのよね？

バジル 「ほほえみながら」うん、僕はハローのに行ってた。

ジェニー あら、ハローじゃマーゲイトで身につくような立派な態度は身につかないわ。

バジル カップを下に置いてあげようか？

ジェニー 「カップをテーブルに置きながら」まあ、ありがとう、大丈夫よ。こっちに来てあたしの側に座ってちょうだい、バジル。

バジル 「ジェニーの椅子の肘掛けに座りながら」ほら。

ジェニー 「バジルの手を取りながら」二人つきりになれてすごく嬉しい。ずっとあなたと二人だけでいたいわ。あたしのこと、愛してるわよね、バジル？

バジル うん。

ジェニー うんと？

バジル 「ほほえみながら」うん。

ジェニー すごく嬉しい。ああ、あなたがあたしを愛してなかったら、どうしていいか分からない。あんたが優しくしてくれてなかったら、あたしは川に身を投げてたわ。

バジル 何て馬鹿なこと言うんだ。

ジェニー 本当よ。

バジルは愛情を込めてジェニーの髪に手を置く。

ジェニー ああ、あんたはすごく立派よ、バジル。あんたをすごく誇りに思ってる。

バジル あんたの妻になるのもすごく誇りに思うわ。

ジェニー 「真面目に」僕のことをあんまり買い被っちゃいけないよ、ジェニー。

ジェニー 「笑って」そんなことないんじゃないかしら。あんたは勇敢で賢くて知的な職業人であたしのすべてなんだから。

バジル お馬鹿さんだね。

ジェニー 「情熱的に」あたしがあなたをどんなに愛しているか、口では言えないくらいよ。

バジル いい夫になれるよう、精一杯努力するよ、ジェニー。

ジェニーはバジルの首に抱きつき、二人はキスを交わす。

第一幕終わり

第二幕

第一幕と第二幕の間に一年が経過している。

パットニーのバジルの家の客間。公会堂に面した壁に廊下から通じるドアがある。下手に寝室に通じるドアが二つあり、反対側に張り出し窓がある。前幕と同じ絵と皿が壁を飾っている。書き物机がくぐり戸の間にある。枝編みの肘掛け椅子のクッション、窓のカーテンと人絹の仕切りカーテン、壁紙の巨大な菊の花にジェニーの影響が顕著である。

ジェニーが縫い物をしており、一方ジェイムズ・ブッシュが肘掛け椅子の一つに横になっっている。

ジェイムズ 今日の後、旦那はどこにいるんだ？

ジェニー 散歩に出掛けたわ。

ジェイムズ 「意地悪く笑って」あいつがそう言ってるだけだろ、お前。

ジェニー 「とっさに目を上げて」あの人をどこで見かけたの？

ジェイムズ いや、見かけた訳じゃない。それに、もし見かけても得意になつて話したりしないよ。

ジェニー 「迫るように」じゃ、どういう意味なの？

ジェイムズ それは、俺がここに来ると、あいつはいつも散歩に出掛けてる……。なあ、お前、来週の土曜まで二ポンド貸してくれないか？

ジェニー 「断りづらそうに」いえ駄目よ、ジミー、どうしようもできないわ。もう渡さないようになって、バジルに約束させられたんですもの。

ジェイムズ 何だと！ あいつはそんなこと約束させたのか？——くそっ、けち臭い奴だ。

ジェニー 兄さんにはたくさん貸してるわ、ジミー。それに、ママにもたくさんね。

ジェイムズ それじゃ、あんな、一ポンドなら何とかできるだろ？ 黙っていればいいんだから。

ジェニー 本当にできないのよ、ジミー。できるんならするわ。でも、あたしたちは借金がすごくたくさんあって悩みの種になっているし、来週には家賃を払わなくちゃいけないのよ。

ジェイムズ 「不機嫌に」俺に貸せないのは、お前に貸す気がないからだ。バジルが何に金を使っているのか知りたいもんだな。

ジェニー あの人はこの一年大変だったのよ——あの人の子供じゃないわ。赤ん坊が死んだ後、あたしはすごく具合が悪くて、お医者さんに五十ポンド近く払わなきゃならなかったの。

ジェイムズ 「嘲笑って」だとすれば、それはあいつと結婚した時にお前がやったことは上出来だったということだ、ジェニー。お前だって、我ながら実にうまくやったと思っただろ。

ジェニー ジミー、やめて！

ジェイムズ どうしてもあいつには我慢ならん。知られたって構うものか。

ジェニー 「むきになって」あの人を否定するようなことは言わせないわ。

ジェイムズ 分かった——怒るなよ。驚いた、何でお前があいつを弁護しなければならぬのか分かったよ。でも、あいつはお前のことなんか大して気にかけちゃいないんだぞ。

ジェニー 「慌てて」どうして分かるのよ？

ジェイムズ 知るもんか！

ジェニー そんなの嘘よ。嘘だわ。

ジェイムズ 俺の目はごまかせないぞ、ジェニー。今日は泣いてたんじゃないか？

ジェニー 「顔を赤らめて」頭が痛かったのよ。

ジェイムズ そういう頭痛は分かるよ。

ジェニー 今朝ちよっと喧嘩したの。だから、あの人が出て行って……。ああ、あの人があたしのことを気にかけていないなんて言わないで。あたし、生きていけないわ。

ジェイムズ 「笑って」馬鹿言え。バジル・ケントだけが男じゃないよ。

ジェニー 「激して」ああ、ジミー、ジミー、時々どうしたらいいか分からなくなるの。あたしはすごく不幸だわ。赤ん坊が生きてさえいてくれたら、あの人を繋ぎ止めておけたかもしれない——あたしを愛させることができたかもしれないの。「ドアの閉まる音が聞こえる。」バジルだわ。

ジェイムズ あいつの幸運を祈るよ。

ジェニー ああ、ジミー、あの人を怒らせるようなことは言わないようにして。

ジェイムズ あいつに文句を言ってやりたいだけだ。

ジェニー ああ、ジミー、やめて。今朝喧嘩したのはあたしのせいなんだから。あの人を怒らせたくて、小言を言ったの。あたしが兄さんに何か言ったなんてあの人に悟らせないで。あたしが確かめる——明日兄さんに一ポンド送れないかどうか、あたしが確かめるから、ジミー。

ジェイムズ 「喧嘩腰で」俺が我慢しているからといって、あいつは俺を見下さない方がいいぞ。俺は紳士だし、あいつより上でないにしても——全く引けを取らないんだからな。

バジルが入って来てジェイムズがいるのに気づくが口を開かない。

ジェイムズ こんにちは、バジル。

バジル 「関心なさそうに」また来たんですか？

ジェイムズ そのようだな。

バジル 「静かに」そうじゃないかと思いました。

ジェイムズ 「会話が進むにつれて段々と攻撃的になりながら」そうなのか？ 俺が自分の妹に会いに来てもいいんじゃないか？

バジル それは当然のことですね。

ジェイムズ それで？

バジル 「ほほえみながら」ただ、あなたが来る時間を僕が——僕が出掛ける時間に合わせてもらえるかと非常に嬉しいのですが。その逆でも同じく嬉しいです。

ジェイムズ それは俺に出て行ってほしいということだろ。

バジル あなたは変わった洞察力を見せますね、ジェイムズさん。

ジェイムズ それで、御託を並べるあんたは何様なんだ？ 知りたいもんだ。

バジル 「平然と」僕ですか？ ちっとも重要でない人間です。

ジェイムズ 「怒って」そうか、俺があんたなら、そんなにいばらないがな。

バジル あなたが失礼でなく無礼にするという役に立つ技を身につけていないということは分かります。

ジェイムズ いいか、こんなことは我慢できん。どう考えてみても、俺はあんたに負けず劣らず立派な人間だ。

バジル それは、否定しようなんて夢にも思っただけじゃない事実です。

ジェイムズ 「憤然として」それなら、何のことで馬鹿にするんだ、えっ？ 俺がここに来た時、俺を鼻であしらったりがみがみ言ったりするのはどういうことだ？

ジェニー 「びくびくして」ジミー、やめて！

バジル 「にっこりして」あなたは実に雄弁ですね、ジェイムズ。討論会に参加すべきだ。

ジェイムズ ああ、勝手に言ってる。よかろう。俺のことを取るに足らない人間だと思ってるみたいだな。まるで俺が自分がどんな人間か分かっていないみたいに言われ続ける理由を俺は知りたいだけだ。

バジル 「ぶっきらぼうに」そうしたいからですよ。

ジェイムズ 好きなように言うがいい。あんたに会いにここに来る訳じゃない。

バジル 「とげとげしくほほえみながら」それなら、僕は少なくとも感謝すべきです。

ジェイムズ 俺には誰とでも同じだけここに来る権利がある。俺は妹に会いに来るんだ。

バジル 本当に、とても思いやりがあつてありがたいです。大抵の場合、あなたは金を借りに来るんだとばかり思っていました。

ジェイムズ 今度はそれを引き合いに出して面と向かつて俺を責めるのか。失業中だとしたら、どうしようもないだろ。

バジル いえ、あなたが失業中だということに対して少しも異議はありません。異議があるのは——ほんの少々ですが——ただ僕があなたを養うことを期待されているということに対してです。今日はいくら欲しかったんですか？

ジェイムズ あんたの汚い金なんか欲しくない。

バジル 「笑って」もうジェニーから借りようとしたんですか？

ジェイムズ いや、するもんか。

バジル だけど、断られたんでしよう。

ジェイムズ 「どなりちらしながら」言っただろ、あんたの汚い金なんか欲しくない。バジル よろしい、それなら、お互い満足な訳です。ジェニーと結婚したんだから、

僕があなたの一家を死ぬまで養う義務があると思っっているように見えませんでした。申し訳ないが、そんな余裕はありません。ですから、どうぞほかの皆さんに伝えてください。もう金を払うのはこりごりだと。

ジェイムズ よくもまあ、ついでに俺があんたの家に入るのを禁じないものだ。

バジル 「冷静に」僕が留守の時はここに来てもいいですよ——行儀よくするからね。

ジェイムズ 俺じゃ不足なんだろ？

バジル ええ、そうです。

ジェイムズ 「怒って」何だと、とんでもない奴だ、あんたは。このしみつたれが！バジル ののしるのはよしなさい、ジェイムズ。失礼ですよ。

ジェイムズ 俺は言いたいことを言うつもりだ。

バジル それに、どうかそんなに大声で話さないで。うるさいです。

ジェイムズ 「意地悪く」俺を片づけたいんだろ。でも、俺はあんたから目を離さないからな。

バジル 「鋭く」それはどういう意味ですか？

ジェイムズ 分かっているだろ。ジェニーが我慢していることがあるんだぞ。

バジル 「怒りを抑えながら」ジェニーと僕だけの間のことは放っておいてください——聞いてますか？

ジェイムズ ほら、怒っただろ？ あんたがどんな奴か、俺が知らないと思ってる。俺にはあんたたち二人がほとんど透けて見える。それに、あんたが思う以上、俺はあんたのことをたくさん知っているんだ。

バジル 「軽蔑して」馬鹿なこと言うもんじゃない、ジェイムズ。

ジェイムズ 「皮肉っぽく」あんたと結婚した時、ジェニーは随分いいことをやってくれたもんだ。

バジル 「冷静になりながら、にっこりして」僕のたくさんの欠点を彼女が話したんですか？「ジェニーに向かって」話すことがたくさんあったに違いないね、君は。

ジェニー 「縫い物を続けながら、時々心配そうに目を上げていたが」あんたを否定するようなことは一言も言っていないわよ、バジル。

バジル 「ジェイムズに背を向けながら」そうか、ねえジェニー、それが楽しいのなら、ぜひ僕のことを君のお兄さんや妹さんやお父さんやお母さんや全員と話し合ってくれたまえ……。欠点がないとしても、僕はかなり鈍感なはずだ。

ジェニー 「心配そうに」あたしは否定するようなことは言わなかったって、この人に言っよ、ジミー。

ジェイムズ 言うことがなかった訳じゃないな。

バジル 「肩越しに」僕はもう疲れましたよ、ジェイムズ兄さん。僕があなただけじゃたら、もう帰りますよ。

ジェイムズ 「ひどく攻撃的に」その気になるまで、俺は帰らないぞ。

バジル 「振り向いて、穏やかにほほえみながら」もちろん、僕たちは二人ともクリスチャンですよ、ジェイムズ。最近是世界についているいと不平を言う文明がたくさんあります。でも、それにもかかわらず、決着をつける最後の言葉には相変わらず一番の強さがあります。

ジェイムズ それはどういう意味だ？

バジル 「上機嫌で」「逃げるが勝ち」というだけのことです。諺は国民の宝と言われている。

ジェイムズ 「憤然として」あなたがやりそうなことだ——自分より小さい奴を殴るのはな。

バジル いや、僕は決してあなたを殴りませんよ、ジェイムズ兄さん。階段の下に放り投げるだけです。

ジェイムズ 「ドアに向かって進みながら」やれるもんなら、やってみろ。

バジル 馬鹿なこと言うのはおよしなさい、ジェイムズ。ちつともいいことありませんよ。

ジェイムズ あんたなんか怖くないぞ。

バジル もちろん、そうでしょう。でも、それにしても——あなたはあまり筋骨たくましい方じゃないですよ？

ジェイムズ この卑怯者！

バジル 「ほほえみながら」あなたの当意即妙の才は大したことないですね、ジェイムズ。

ジェイムズ 「安全のためにドアのところに立ちながら」仕返ししてやる。

バジル 「眉を吊り上げながら」ジェイムズ、五分も前に出て行くよう言いましたよ。

ジェイムズ 行くよ。俺がここにいたいと思ってるのか？ さようなら、ジェニー、俺は誰からだろうと侮辱されて我慢しているつもりはない。「ドアをボタンと閉めて出て行く。」

バジルは静かにほほえみながら、書き物机のところに行って何枚かの書類をめくる。

バジル 兄ジェイムズの唯一の見返りは、時々ちょっとばかり楽しませてくれることだね。

ジェニー せめて礼儀正しくしてくれてもいいのに、バジル。

バジル 礼儀正しさは六か月前に使い果たしたよ。

ジェニー　とにかく、あたしの兄なのよ。

バジル　それは僕が心から残念に思う事実だよ。

ジェニー　兄の何が悪いのか、あたしには分からない。

バジル　そうなの？　それでも構わないよ。

ジェニー　社交界の人間じゃないのは分かっている。

バジル　「笑って」うん、公爵夫人のお茶会じゃばつとしないだろうね。

ジェニー　でも、兄はそんな目に遭っても平気でしょ？

バジル　全然ね。

ジェニー　それなら、どうして犬みたいに扱うの？

バジル　ねえジェニー、それは違う……。僕は犬が大好きなんだ。

ジェニー　いえ、あんたはいつも鼻であしらっている。兄はあたしほどよくないの？　あんたはあたしを下に見て結婚したのね。

バジル　「冷ややかに」君と結婚したからといって、必ず君の家族全員を温かく迎えないかならないというのが、僕には本当に理解できないんだ。

ジェニー　どうしてあたしの家族が好きじゃないの？　みんな正直でちゃんとしているのに。

バジル　「飽き飽きしたようにちよつとため息をついて」ねえジェニー、僕たちは毎日下着を替えるからといって友達を選ばないのと同じように、正直でちゃんとしているからといって友達を選ばないよ。

ジェニー　貧乏なら仕方がないわ。

バジル　ねえ、僕はある人たちにあらゆる美点とあらゆる美德があることは喜んで認めるけど、ひどく退屈させられるんだ。

ジェニー　うちの人たちが名士だったら、退屈させられないでしょうね。

バジルは短く笑うが、答えない。ジェニーは苛立ってさらに怒り続ける。

ジェニー　でも、何にしても、うちは思うほど悪い身分じゃないわ。母の父親は紳士だったんだから。

バジル　お母さんの息子がそうだったらよかったのに。

ジェニー　あんたのこと、ジミーが何と言ってるか知ってる？

バジル　大して気にならないけど。君がとてもそうしたいなら、教えてくれてもいいよ。

ジェニー　「怒って顔を赤らめながら」あんたはとんでもない俗物だって言ってるわ。

バジル　それだけ？　僕だったら自分のことを言うのにもつとずつと悪い言葉をでっちあげることができたのに……。「口調を変えて」いいかい、ジェニー、そんなささいな事を気にしても意味がない。無理して人を好きになることはできないんだ。申し訳ないが、僕は君の親族には我慢できない。一体どうして君はあきらめて我慢しないんだ？

ジェニー 「しつこく」あんたはうちの家族が一流でないからといって、付き合うのにふさわしくないと思っているのよ。

バジル ねえジェニー、僕は君の家族が食料品屋や小間物屋であることに何の異存もないよ。ただ、僕たちには仕入れ値で売ってもらいたいだけなんだ。

ジェニー ジミーは食料品屋でも小間物屋でもないわ。競売の会社の社員よ。

バジル 「皮肉っぽく」そりゃ恐れ入った、謝るよ。お兄さんが食料品屋だと思っただのは、この前光栄にもお越しいただいた時、うちがお茶に何ポンド払っているか聞かれて、同じ額で売ると提案されたからなんだ……。でも、その時、家に火災保険を掛けることやオーストラリアの金鉱を買うことも提案されたんだ。

ジェニー それは、できるだけお金を貯める方が……。『言いよどむ。』

バジル 「ほえみながら」続けて。どうか、僕の気持ちを傷つけるのが怖いからといってためらわないで。

ジェニー 「喧嘩腰で」いいわ、それなら、あんたみたいにぼんやりしているよりはそうする方がいいからよ。

バジル 「肩をすくめながら」本当のところ、君を喜ばすためだとしても、僕がポケットに小さなお茶のサンプルを持って歩き回って、友達を訪ねた時に一ポンドか二ポンドで売るなんてできないと思う。それに、友達が払ってくれるとは思えない。

ジェニー 「軽蔑して」いや違う、あんたは紳士で法廷弁護士で作家だから、大事にしている白い手を汚すようなことはできないのよね？

バジル 「自分の手を見てからジェニーを見上げて」それで、本当のところ、君は僕に何をやってほしいの？

ジェニー それは、あんたは五年バーに来てたから。今頃はひとかどの人物になるだろうと思ってたのよ。

バジル ずる賢い事務弁護士連中に訴訟事件を僕に回すよう強制することはできないからね。

ジェニー ほかの連中はどういうふうにしてうまくやってるの？

バジル 「笑って」一番簡単な方法は、きっと、ずる賢い事務弁護士の娘と結婚することだね。

ジェニー バーの女給の代わりに？

バジル 「真剣に」そんなこと言っていないよ、ジェニー。

ジェニー 「かっとなって」いいえ違うわ。そうは言っていないけど、ほのめかしたのよ。あんたは直接言わないけど、いつだってほのめかしたり遠回しに言うとするんだから——あたしを狂乱状態に陥らせるまでね。

バジル 「ちよつと間を置いて、真剣に」君の気持ちを傷つけたんなら申し訳ない。誓ってそんなつもりじゃないんだ。僕はいつだって君に親切にしようとしてるんだよ。

バジルはジェニーを見て許しか詫びの言葉をかけられるのを期待する。しかし、ジェニーは肩をすくめると、一言も発せずにぶすつと縫い物に目を落とし、また縫い物を始める。すると、バジルは唇をすぼめて書き物を拾い上げ、ドアの方に向かって行く。

ジェニー 「素早く目を上げて」どこへ行くの？

バジル 「立ち止まりながら」書かなきゃいけない手紙があるんだ。

ジェニー ここで書けないの？

バジル いいよ——その方がよければ。

ジェニー 誰に書いてるか、あたしに見られたくないの？

バジル 君が僕の手紙のやり取りについて全部知ることに、少しも異存はないよ：。そして、それはさい先のいいことだ。必ず君がやり取りをよく知るようになるからね。

ジェニー すぐ、あたしがあなたの手紙を読んだといって非難するくせに。

バジル 「にっこりして」君が僕の机のところに行ったら後は必ず書類が乱雑になっ
たままだからね。

ジェニー あんたにそんなこと言う権利はないわ。

バジルは間を置いてジェニーをじつと見る。

バジル 君は、僕がいない時に机のところに行って手紙を読まないって誓う気はあるかな？ さあ、ジェニー、質問に答えてよ。

ジェニー 「動揺するが、答えると言うバジルの視線に押されて」えーと、あたしは
あなたの妻よ。知る権利があるわ。

バジル 「苦々しげに」君は妻の義務について随分おかしな考えを持っているね、
ジェニー。僕の手紙を読んだり、通りで僕の跡をつけたりすることも含ま
れているなんて。それに、君の物事の体系には我慢や思いやりや寛容とい
うことが入ってこないみたいだ。

ジェニー 「ぶすつとして」どうしてほかの所で手紙を書きたいの？

バジル 「肩をすくめながら」その方が静かだろうと思ってるね。

ジェニー あたしが邪魔かしら？

バジル 君が話していると、ちよつと書きにくいんだ。

ジェニー どうしてあたしが話しちゃいけないの？ あたしじゃ駄目だと思ってるの、
ねえ？ 手紙よりあたしの方が大事だと思ってるのに。

バジルは答えない。

ジェニー 「怒って」あたしはあなたの妻なの？ それとも違うの？

バジル 「皮肉っぽく」それを証明するために、君は結婚証明書を用心深くしま
込んでいるね。

ジェニー それなら、どうしてあたしを妻として扱わないの？ あんたは、あたしが家の世話をして夕食の指示をしてあんたの服を繕うのにふさわしいだけだと思ってるみたいね。そして、その後は出て行って、召使と一緒に台所にいればいいんだわ。

バジル 「再びドアの方に移動しながら」君は大騒ぎすることに意味があると思ってるの？ こんなこと、僕たちは今までに何回も言ってきたみたいだ。

ジェニー 「遮って」あたしは片をつけたいわ。

バジル 「うんざりして」僕たちはこの六か月、週に二回は片をつけようとしてきた——でも、いまだに決着がつかない。

ジェニー あたしはつけ込まれてばかりいるつもりはないわ。あたしはあんたの妻であんたと対等なんだから。

バジル 「薄笑いを浮かべて」ほう、もし君が女性の権利を求めるつもりなら、どうぞ僕の選挙権を行使なさい。そうすれば、お望みなら同時に全候補者に投票できるから。

ジェニー あんたは冗談だと思ってるみたいね。

バジル 「苦々しげに」いや違う、そうじゃないって誓うよ。あまりに長く続いたからね。どこで終わるかは神のみぞ知るだ……。世間では、結婚の最初の年は最悪だと言ってる。確かに、僕たちのは十分ひどかった。

ジェニー 「攻撃的に」あたしのせいだと思ってるんでしょ？

バジル 一応、僕たちの両方に責任があると思わないか？

ジェニー 「笑って」まあ、あんたが自分も関係があると分かってくれて嬉しいわ。僕は君を幸せにするよう努力した。

ジェニー だとしたら、あんまり成功じゃなかったわね。あんたはあたしが幸せになれそうだと思ってたの——あんたがあたしじゃふさわしくない一流の友達のために昼間から夜半までずっとあたしを独りぼっちにしておく時間に？

バジル それは違う。僕は昔からの友達とはほとんど会っていない。

ジェニー マーレー夫人以外とはでしょ？

バジル 去年はマーレー夫人と十二回くらい会ったかな。

ジェニー あら、言う必要はないわ。あたし、知ってるもの。その人は上流婦人なんでしょ？

バジル 「非難されているのに無視しながら」仕事が君から僕を遠ざけているんだ。ずっとここにいることはできない。君がどんなに退屈するか考えてみて。随分たくさん利益をあんたの仕事はもたらすのね。借金しないで暮らすだけのお金を稼げないんだから。

バジル 「上機嫌で」僕たちには借金がある。でも、そういう実に立派な状態をこの王国の貴族や紳士階級の半分と共有しているんだ。僕たちはどちらもうり繰り上手ではないし、今年はこちらとばかり身分不相応の生活をした。でも、これからはもっと節約しよう。

ジェニー 「ぶすつとして」ご近所はみんな、うちが商人からつけて買ってるのを知ってるわ。

バジル 「刺々しく」僕と結婚したのは君が期待してたほどお得な買い物じゃなくて申し訳ないね。

ジェニー あんたは何で成功するのかしら？ あんたの本は大成功だったんでしょ？ あんたは目覚ましいことをして名を上げようと思ってたのに、本はちっとも成果なんか、成果なんか、成果なんかなかった。

バジル 「機嫌のよさを取り戻しながら」そういう運命が僕の本よりいい本に振りかかったんだ。

ジェニー そうなったのも当然よ。

バジル ほう、君にそれが分かるとは思わなかったな。邪悪な伯爵と美しい公爵夫人について書くことは、我々の誰にでも与えられている訳ではないからねでも、あたしだけじゃなかった。新聞だって褒めてくれたんじゃないの？新聞が揃って非難したことは、僕にとって唯一の慰めだった。

ジェニー その中の一つが英語の文法を勉強しろと忠告してた。それに、あんたはあたしたちみたいな貧乏人を見下すようなご立派な紳士だった！

バジル 印刷屋がミスしたからといって人をのしるような批評家が、どんな喜びをその人の愛妻にもたらすんだろうかと、僕はしばしば疑問に思うんだ。この六か月で、あたしはあんたのことがすごくよく分かった——赤ちゃんが死んでからね。あんたには自分を尊敬できる理由がないのよ。

バジル 「笑って」ねえジェニー、僕は決して素敵なアイドルのふりなんかしなかったよ。

ジェニー あんたが何者か、もう分かっている。あたしは馬鹿だから、あんたがヒーローだと思ってた。あんたはただの負け犬よ。何をやろうと、みじめな負け犬なのよ。

バジル 「かすかにため息をついて」君が正しいのかもしれないね、ジェニー。

バジルは行ったり来たりしてから立ち止まり、一瞬物思いにふけりながらジェニーを見る。

バジル 僕は時々思うんだ。僕たちは幸せにならないかなかって——別々に暮らせばね。

ジェニー 「びっくりして」どういうこと？

バジル 僕たちがうまくやっていると見ええない。それに、状況が少しでもよくなっていくような可能性が僕には見えないんだ。

ジェニー 「じっと見据えて」別居したいって言うの？

バジル 僕たち二人にとって、その方がいいと思うんだ——少なくとも、しばらくの間はね。その後なら、またやってみることができるかもしれない。

ジェニー それで、あんたは何をするの？

バジル しばらく外国に行くよ。

ジェニー マーレー夫人とね。そうでしょ？ あんたはあの女と行きたいのよ。
バジル 「苛立って」いいや。もちろん、違う。

ジェニー そんなの信じない。あんたはあの女に恋してるんだから。

バジル 君にそんなこと言う権利はない。

ジェニー そうかしら？ あたしは目を閉じて何も言っちゃいけないみたいね。あんたはあの女に恋してる。この何か月かで、あたしが気づかなかったとでも思うの？ だから、あんたはあたしを捨てたいのよ。

バジル 僕たちが一緒に暮らすのは無理だ。僕たちは考えが合わないし、幸せにはなれない。お願いだから、別居しておしまいにしようよ。

ジェニー あんたはあたしに飽きたのね。あたしから欲しいものは全部取ってしまったから、もう用はないのよ。素敵な上流夫人がやって来たもんだから、あたしにはメードみたいに暇を出すって訳ね。あんたがあの女に恋してるって、あたしに分からないと思う？ あの女の一瞬の不快感をあがなうために、あんたは考えもなしにあたしをいけにえとして捧げようとしてる。あんたはあの女を愛してるから、あたしが憎いのよ。

バジル そうじゃないんだ。

ジェニー あんたはあの女に恋してることを否定できる？

バジル 君は気が変になってるだけだ。僕は君が嫉妬する原因になるようなことは何もやっていない。

ジェニー 「情熱的に」あんたはあの女に恋してないって誓える？ 名誉にかけて誓える？

バジル 君は気が変になってる。

ジェニー 「興奮をつのらせながら」誓ってよ。できないのね。あんたはあの女にぞっこんなんだ。

バジル 馬鹿な。

ジェニー 誓って。名誉にかけて誓って。あの女のこととは好きじゃないと誓ってよ。

バジル 「肩をすくめながら」誓うよ……名誉にかけて。

ジェニー 「軽蔑して」そんなの嘘よ……！ あの女だってあんたと同じくらい恋してるんだから。

バジル 「ジェニーの両腕をつかみながら」どういうことなんだ？

ジェニー あんたはあたしは何でもお見通しじゃなかったとも思ってるの？ あの女がここに来たその日に分かった。あの女があたしに会いに来たと思ってるの？ あの女はあたしを軽蔑してた。あたしが上流婦人じゃないから。あの女がここに来たのはあんたを喜ばせるため。あたしに礼儀正しくしたのもあんたを喜ばせるため。あの女のところに会いに来るよう誘ったのもあんたを喜ばせるためだった。

バジル 「心を落ち着かせようとしながら」そんなの馬鹿げてる。あの人は昔からの友達なんだ。来ても当然だ。

ジェニー そういう友達なのは分かっている。あの女があんたを見る時の様子やどんなふうにあんたを目で追うか、あたしが気づかなかったと思う？ あの女は

あんたの言う一言一言を一心不乱に聞いてた。あんたがほほえむとほほえんでた。あんたが笑うと笑ってた。ああ、あの女もあんたに恋してると思ってたわ。あたしは愛がどういうものか知ってるから感じたのよ。そして、あの女があたしを見た時、あんたを奪ったからあたしを憎んでるんだと気づいた。

バジル 「気持ちを抑えられずに」ああ、何てみじめな生活を僕たちは送っているんだ！ 僕たちは二人とも全くもって不幸だった。こんなのは続きっこないし——出口は一つしか見つからない。

ジェニー この一週間考え込んでいたのはそのことなんですよ？ 別居だなんて！ 何かあると思ってたけど、それが何か分からなかった。

バジル 僕は自分の気持ちを抑えるために最善を尽くすけど、時々それが無理だと思ふ。僕たちが二人とも後悔するようなことを言ってしまうようになるんだ。お願いだから、別れよう。

ジェニー 嫌よ。

バジル こんなひどい喧嘩を続けることはできない。あまりにも下劣だ。僕たちが結婚したのがひどい間違いだったんだ。

ジェニー 「恐怖に襲われて」バジル！

バジル ああ、君も僕と同じくらいよく分かっているに違いない。僕たちはお互い完全に不釣り合いだった。そして、赤ん坊の死が僕たちを結びつける唯一の必要性を取り除いてしまったんだ。

ジェニー あんたはまるであたしたちが便利だから一緒のままだけみたいに見えるわね。

バジル 「情熱的に」行かせてくれ、ジェニー。僕はもう耐えられない。気が狂いそうさ。

ジェニー 「苦痛と苦悶に満ちて」あんたにとっては何でもないことね。

バジル ジェニー、僕は一年前に最善を尽くした。与えなければいけないものはすべて君に与えた。とても十分とは言えなかったけど。今は僕に自由を返してほしい。

ジェニー 「取り乱して」あんたは自分のことしか考えていない。あたしはどうなるの？

バジル もっとずっと幸せになれるよ。僕たち二人にとって、一番いいことなんだ。僕は君のためにできることは何でもするし、お母さんと妹さんをここに住まわせることもできる。

ジェニー 「悲しみと激情で叫び声を上げて」でも、あたしはあんたを愛してるのよ、バジル。

バジル 君が！！ 何とまあ、君が六か月も僕を耐えがたいほど苦しめた。君が僕の毎日を重荷にした。君が僕の人生を完全に地獄にしたんだよ。

ジェニー 「恐怖と狼狽で長いうめき声を上げて」ああっ！

二人が向かい合っていると、メイドのファニーが入って来る。

ファニー　ハリウエル様です。

ジョンが入って来る。ジェニーはジョンの手を取った後、椅子に沈み込んで、続く会話に注意を払わない。ひどく取り乱して、前を見つめている。バジルは冷静に自然に見せようと精一杯努力している。

バジル　やあ、この界限で何をしているんだ？

ジョン　こんにちは、ケント夫人。リッチモンドで早めのランチを食べていたんだけど、帰りにちよつと寄ってみようと思ったんだ。土曜の午後だから、いるだろうと思ってね。

バジル　君に会えて本当に嬉しいよ。「ジョンはジェニーを横目で見て、僅かに眉を吊り上げる」でも、僕は市内に行かなければならないから、君はちよつど間に合ったんだ。一緒に行けばいい。

ジョン　いいとも。

ジェニー　どこへ行くの、バジル？

バジル　チャンスリー・レーンまで、仕事の代理人に会いにね。

ジェニー　「疑わしげに」土曜の午後には？　そんな、その人いないわよ。

バジル　約束があるんだ。

ジェニーは答ええないが、明らかに信じていない。ジョンはいささか困惑しながら、会話しようと努力する。

ジョン　僕はここに来ながら、人は――川と――小さな自分の庭のある郊外で牧歌的な生活を送るべきだと思った。

バジル　「皮肉っぽく」それに、全部が全く似かよった小さな家が五〇軒向かい合っている光景が望める郊外でね。

ジョン　それに、その静けさには本当にうっとりする。

バジル　うん、そうだ。静かな隔絶感を乱す車はミルクを運ぶ荷車と手回しオルガンだけ。実に牧歌的だ。

ジェニー　そういうのがとても素敵な地区だと思う。それに、ここにはかなり上の階級の人たちがいるわ。

バジル　ちよつと着替えてくるよ。「時計を見ながら」四時十五分の列車がある。

ジョン　分かった、急いで。

バジルは部屋から出て行く。ジェニーはすぐにさっと立ち上がり、ジョンの方に向かって行く。取り乱して、ほとんど何を言ったらいいか分からない。

ジェニー　あんたを信用していいかしら？

ジョン どういうこと？

ジェニーはジョンの目をのぞき込み、疑いながらも、ジョンが助け
てくれる気があるかどうか見極めようとする。

ジェニー あんたはいい人だった。あたしがバーの女給だからといって、見下したり
しなかった。信用していいって言ってちょうだい。あたしには話せる人が
なくて、話さないと気が狂いそうなの。

ジョン どうしたの？

ジェニー 何か聞いたら、本当のことを言ってくれますか？

ジョン もちろん。

ジェニー 誓って？

ジョン 誓って。

ジェニー 「一瞬の間を置いて」バジルとマーレー夫人の間に何かあるの？

ジョン 「びっくりして」いいや。もちろん、ないよ。

ジェニー どうして分かるの？ 本当かしら？ あつても、言わないでしょ。あたし
が上流婦人じゃないからといって、みんなあたしに敵対するんだから……。
ああ、あたしはすごく不幸だわ。

ジェニーは涙を抑えようとするが、半ばヒステリー状態である。ジ
ョンはびっくりしてジェニーを見つめるが、言葉が出ない。

ジェニー あたしたちがどんな生活を送っているか知ってさえくれれば！ あの人は

君たちはすぐくまうまうかと思つてた。

ジョン そりゃ、あんたの前ではずっと体面を繕つてたから。あの人はあたしと結

婚したことを後悔してるのに、あんたに知られるのが恥ずかしいのよ。あ
の人は別居したがってるの。

ジョン 何だつて！

ジェニー 「もどかしげに」もう、そんなに驚いたような顔しないで。あんたは全く
の馬鹿じゃないでしょ？ 今日あんたが来る前に提案された。あたしたち、
大喧嘩してたのよ。

ジョン でも、一体何のことでそうなったの？

ジェニー 知るもんですか！

ジョン そんな馬鹿な。たまたまちよつと喧嘩しただけに違いはない。君だつて当然
それくらいのことはあるだろうと思つていたはずだ。

ジェニー いいえ、違う。そうじゃないの。あの人はあたしを愛してない。あの人は
あんたの義理のお姉さんに恋してるのよ。

ジョン そんなことあり得ない。

ジェニー あの人はいつもあるそこに行くの。先週は二回行ったし、その前の週も二回行ってるわ。

ジョン どうして分かるの？

ジェニー あたし、跡をつけたのよ。

ジョン 通りで跡をつけたの、ジェニー？

ジェニー 「喧嘩腰で」そうよ。あたしがあの人にとって上流婦人らしさに欠けるなら、通りで上流婦人を演じる必要はないもの。もうあきれたでしょ？

ジョン 君を非難するつもりはないよ、ジェニー。

ジェニー それに、あたしはあの人の手紙も読んだわ——あの人は何をやっているのか知りたかったから。一つ湯気を当てて開けたけど、あの方はそれを見ても一言も言わなかった。

ジョン ええっ、どうしてそんなことしたの？

ジェニー 本当のことが分からなければ、あたしは生きていけないからよ。マーレー夫人の筆跡だと思った。

ジョン 夫人からのものだったの？

ジェニー いいえ。石炭商からの領収書だった。あの方がその封筒を見た時、どんなにあたしを軽蔑してるか分かった——封筒をあまりうまく貼り直せてなかったから。そして、それがただの領収書だと分かった時、あの方が口をゆがめるのが見えたわ。

ジョン 誓って、君が嫉妬する理由は大してないと思うけど。

ジェニー あら、あなたは知らないのよ。先週の木曜日、あの方はあそこで食事をすることになっていただけ、あの方の様子を見せたかったわ。落ち着きがなくて、じっとしていられなかった。一分ごとに時計を見てた。興奮で目をぎらぎらさせて、あの方の胸の鼓動が聞こえそうだった。

ジョン そんなの本当のはずがない。

ジェニー あの方はあたしを愛してなかった。義務だと思ったから、あたしと結婚したのよ。それから、赤ちゃんが死んだ時——あたしが畏にかけたと思ったんだわ。

ジョン 彼はそんなこと言ってないよ。

ジェニー ええ。あの方は何も言わないけど——目を見れば分かるの。「情熱的に両手を握り締めながら」ああ、あなたはあたしたちの生活がどんなか分かっていない。何日も、あたしの質問に答える以外、あの方は一言もしゃべらない。そして、その沈黙がただただあたしを狂わせるの。あの人に罵られるんだったら、あたしは気にしない。あたしはひたすら見られてばかりいるよりは殴られる方がいい。あたしにはあの方が自分を抑えているのが分かるの。あの方は今日、今までよりもたくさんしゃべったわ。終わりが近いのが分かった。

ジョン 「どうしようもないという仕草をして」とても残念だ。

ジェニー ああ、あんたまであたしを哀れまないで。哀れみはもうたくさん。そんなの欲しくない。バジルは哀れみからあたしと結婚した。ああ、そうじゃなければよかったのに。そういう不幸には耐えられない。

ジョン 「真剣に」あのね、ジェニー、彼は名誉を重んじる人なんだ。

ジェニー ええ、あの人が名誉を重んじる人なのは分かっている。重んじてる名誉がもうちよつと少なければよかったんだけど。結婚生活で立派な考えはたくさん必要じゃないもの。そんなものは役に立たない……。ああ、どうしてあたしは自分と同じ階級の人を愛せなかったのかしら？ もつとずっと幸せになつてたでしように。バジルがシティーの会社員とか何かじゃないことは、あたしも結構自慢にしてた。でも、あの人は正しいけど、あたしたちは決して幸せになれないわ。

ジョン 「ジェニーを落ち着かせようとしながら」いや、違う、そんなことはない。

あまり深刻に考えすぎちゃいけないよ。

ジェニー 昨日、今日や明日のことじゃないの。あたしは変わらない。結婚した時、あたしが上流婦人じゃないことはあの人も知ってた。あたしの父親は週二ポンド十シリングで五人の子供を育てなければならなかった。その上に、娘たちをブライトンの寄宿学校にやっつてパリで磨きをかけさせるなんて期待できないわ……。上流夫人がしそうにもないことをあたしがやったり言ったりすると、あの人は一言もしゃべらないで——唇をすぼめて見るの……。そうすると、あたしは気が変になつて、あの人を怒らせるようなことをしてしまう。たまには、あたしの方から鼻持ちならないことをしようとすることもあるわ。シティーのバーではたくさんを知ることから、あたしもバジルが参るような言葉はよく分かっている。たまにはちよつとばかり仕返ししたいし、あの人のどこが無防備で傷つけることができるかちゃんと分かっているもの。「嘲笑って」あたしが作法に従つて食べなかつたり、男の人を「あいつ」と呼んだりする時に、あの人がどんな顔をするか、あなたにも見た方がいいわ。

ジョン 「そつけないく」それじゃいつまで経つても家庭の不幸が終わらない可能性が広がるね。

ジェニー そりゃ、あの人に対して公平じゃないのは分かっているけど、冷静じゃいられなくなるの。いつもいつも上品にしちゃいられない。たまには脱け出さずにいられない。自由に振る舞わなきゃと思うの。

ジョン それなら、どうして別居しないの？

ジェニー あたしがあの人を愛してるから。ああ、ジョン、あたしがどれだけあの人を愛してるか、あんたには分からないのよ。あの人を幸せにするためだったら、あたしは何でもする。あの人を望むんだったら、あたしは自分の命だつて捧げるわ。ああ、口では言えないけど、あの人のことを思うと、あたしの胸は燃えて、時には息もできないほどなの。あたしにとつてあの人がある世界のすべてだつて、あの人に分からせることができない。あの人にあたしを愛させようとするけど、嫌われるだけ。どうすれば、あの人に分か

らせることができるかしら？ ああ、あの人が分かってさえくれれば、きっとあたしと結婚したことを後悔しないと思う。あたしは感じるの——まるであたしの心が音楽でいっぱいになったみたいに感じるの。それで、あたしはいつもそれを表そうとするんだけど、何かが邪魔するのよ。

ジョン 彼が別居のことを話した時、本気だったと思う？

ジェニー あの人はじっと考え込んだ。あたしはあの人のことはすぐよく分かるから、何か考えていることがあるのは分かった。ああ、ジョン、あの人がいないとあたしは生きていけない。死んだ方がましよ。あの人に捨てられたら、あたしは本当に自殺するわ。

ジョン 「行ったり来たりしながら」君を助けてあげられるといいんだけど。何ができるか分からない。

ジェニー いいえ、できることがあるわ。あんたの義理のお姉さんに話してちょうだい。あたしに情けをかけるように頼んでちょうだい。多分、お姉さんは自分のやっтерることが分かってないのよ。あたしがあの人を愛してるって、お姉さんに伝えてちょうだい……。ちよつと待って。バジルが来るわ。あたしが言ったことをあの人知ったら、二度と口を利いてもらえなくなるから。

バジルがフロックコートを着てシルクハットを手に持って入って来る。

バジル 用意ができた。列車にちよつど間に合う時間だ。

ジョン 分かった。さようなら、ケント夫人。

ジェニー 「バジルに視線を向けたまま」さようなら。

男二人は出て行く。ジェニーはドアのところまで走って行って声をかける。

ジェニー バジル、ちよつと待って、バジル！

バジルがドアのところ姿を現す。

ジェニー 本当にチャンスリー・レーンに行くの？

バジルは勘弁してくれという身振りをして答えずにまた出て行く。

ジェニー 「独りで」そう、それなら、自分で確かめるわ。「メイドに呼びかける。」
ファニー……！ あたしの帽子と上着を持って来て。早く！

ジェニーは窓のところまで走って行き、窓越しにバジルとジョンが去って行くのを見る。ファニーが服装類を持って現れる。ジェニーは急いで身に着ける。

ジェニー 「ファニーに手伝ってもらいな」今、何時？

ファニー 「時計を見上げながら」四時五分過ぎです。

ジェニー 間に合うわ。四時十五分て言ってたもの。

ファニー お茶の時間にはお戻りでしょうか、奥様？

ジェニー 分からないわ。「ドアのところまで走り、急いで出て行く。」

第二幕終わり

第三幕

同じ日の午後。

メイフェア、チャールズ・ストリートにあるマーレー夫人の贅沢な家具が備えつけられている客間。部屋の中のすべてが美しいが、獨創性よりもむしろ持ち主の趣味の良さがうかがわれる。

ヒルダが凝ったデザインのガウンを着てティーテーブルの近くに座っており、メイベルが一緒にいる。ロバート・ブラックリー氏が座っている。でっけりした丸顔の男で、ひげはきれいに剃っているが、頭は禿げ上がっている。四十歳くらい。フロックコートを着てエナメル革のブーツを履き片眼鏡をかけた最も流行の服装である。非常に早口で、軽佻浮薄な話し方をし、決まって自分の言うことをひどく面白がる。

メイベル 今、何時ですか、ブラックリーさん？

ブラックリー もう教えませんか？

メイベル ひどい人ね！

ブラックリー あなたの情報に対する情熱には何か病的なものがありますね。もう五回も教えましたよ。

ヒルダ そういふのはあなたを楽しませるためにささやかながら最善を尽くしてきましたわたしたちにとってあまり好意的とは言えませんね。

メイベル ジョンに何があったのか想像もつかなくて。ここに迎えに来る約束だったのに。

ヒルダ 気長に待ってさえいれば、きっと来るわよ。

メイベル でも、気長に待つのは嫌なの。

ヒルダ 彼を行かせなければよかったのに。

メイベル 昼食の後、あなたのお友達のカントさんに会いにパットニーまで行ったの。最近会わなかった？

ヒルダ ジョンに？ 昨日、マーティンさんのところで会ったわ。

メイベル 「ひょうきんに」カントさんよ。

ヒルダ 「関心なさそうに」ああ。この前、訪ねて来たわ。「話題を変えるために」いつになくおとなしいのね、ブラックリーさん。

ブラックリー 「ほえみながら」言うことが全くなって。

メイベル 賢い人がたくさんしゃべると、それは「いつになく」だけど。

ヒルダ 今は何かなさっているの？

ブラックリー ええはい、無韻詩の芝居を書いています。

ヒルダ 素晴らしいわ。何についてのものですか？

ブラックリー クレオパトラです。

ヒルダ　まあ！　シェイクスピアもクレオパトラについての芝居を書きましたよね？

ブラックリー　多分ね。わたしは読んでいませんがね。シェイクスピアは退屈です。ずっと昔の人ですし。

メイベル　もちろん、読む人たちもいるわ。

ブラックリー　そうですか？　どういう人たちですか？

ヒルダ　「ほほえみながら」特別風変わりな点のある人たちじゃありません。

ブラックリー　イギリス人はとても独創的です。

メイベル　アパートに電話しに行こうと思うの。ジョンは真つ直ぐ家に帰ったんじゃないかしら。

ブラックリー　そうしなさい。わたしもすごく心配になってきました。

メイベル　「笑いなながら」おかしな人。

メイベルは出て行く。

ヒルダ　わたしはあなたほどくだらないことを言う人に会ったことがありません。

ブラックリー　それはわたしの常套手段です。もしわたしが真面目で勤勉で節約家だと知ったら、わたしの詩を読む人なんかいないでしょう。実を言うと、わたしは牧師の娘のような貞淑な生活を送っていますが、それを知ったら、わたしだと気づく批評家は一人もいないでしょう。

ヒルダ　そして、軽率な人たちが新聞で読むつまらない作品は……。

ブラックリー　義務に対する情熱のもう一つの証しにすぎません。イギリス国民は詩人がロマンチックな生活を送ることを望んでいますからね。

ヒルダ　あなたって、真面目な時があるの？

ブラックリー　木曜日に一緒に昼食を食べに来てもいいですか？

ヒルダ　「ちよっと驚いて」いいですとも。でも、どうして木曜日なの？

ブラックリー　その日にあなたに結婚を申し込むつもりだからです。

ヒルダ　「にっこりして」ごめんなさい、外で昼食を食べるのを思い出したわ。

ブラックリー　がっかりです。

ヒルダ　その代わり、ソネットの題材を提供します。

ブラックリー　わたしと結婚してくれないんですか？

ヒルダ　そうよ。

ブラックリー　どうして？

ヒルダ　「面白がって」ちっともあなたを愛してないんですもの。

ブラックリー　結婚を申し込む人は、限りなく長い年数、向かい合って朝食を食べるのを平常心で楽しみにできるかどうか、自問するべきです。

ヒルダ　随分現実的なのね。

ブラックリー　ねえ奥方、ロマンスが必要なら、わたしのベラム装丁の全集を送りますよ。わたしはピュリスやクロエーや誰も知らない人にまで及ぶロマンス

を十巻、次から次へと機械的に出していますからね。主よ、わたしをロマンチックな妻から救いたまえ。

ヒルダ　でも、わたしはどうしようもないくらいロマンチックなんじゃないかしら。

ブラックリー　それなら、詩人と六か月結婚すれば治るでしょう。

ヒルダ　治りたくないわ。

ブラックリー　木曜日は、家で昼食を食べませんか？

ヒルダ　いいえ。

執事が入って来る。

執事　ハリウエル様、ケント様です。

バジルとジョンが現れ、同時にメイベルが電話をしていた部屋から入って来る。

メイベル　「ジョンに向かって」ひどい人ね！　電話しようとしたところよ。

ジョン　待たせたかな？　バジルと一緒にチャンスリー・レーンに行ってたんだ。

ジョンは振り向いてヒルダ、ブラックリーと握手をする。一方、ヒルダに挨拶を済ませたバジルは、前に進み出てメイベルと話す。メイベルとバジルの会話は小声でされる。

バジル　こんにちは。随分長いことジョンを引き留めたから、君は怒っているに違いないね。

メイベル　実は、あの人に用はないのよ。

バジル　「頭でブラックリーを指しながら」ちよつと、あれは誰だったかな？

メイベル　ロバート・ブラックリーよ。知らないの？

バジル　詩人だったかな？

メイベル　もちろん。もしテニソンが死んだ時に廃止になってなければ、彼は桂冠詩人の職を与えられただろうと言われているわ。

バジル　「唇をぎゅつと締めながら」むしろ卑劣な悪党じゃないの？

メイベル　まあ、かわいそうに、彼がどうしたって言うの？　彼はヒルダの一番新しいセレブ友達よ。ヒルダを熱愛してるふりをしてる。

バジル　彼がかかわったグリーンジ事件を覚えてないの？

メイベル　「驚いた口調で」でも、ねえケントさん、あれは二年前のことよ。

ヒルダ　ケントさん、あなたをブラックリーさんにご紹介したいの。

バジル　「近寄りながら」はじめまして。

ジョンは前に進み出て妻のところまで来る。

メイベル ひどい人！

ジョン ねえ、メイベル、バジルはよくここに来るの？

メイベル 知らないわ。先週ここで会ったけど。

ジョン 一体どうしてここに来るんだろう？ 用事はないのに。

メイベル 今日はあなたが連れて来たのよ。

ジョン そうじゃないんだ。彼がどうしても来たいと言ったんだ——僕が君を迎え

に行かなければならないと言った時にね。

メイベル ひよっとすると、わたしに会いに来たのかしら。

ジョン 馬鹿馬鹿しい！ 君がヒルダに話すべきだと思うよ。

メイベル ねえジョン、気でも違ったの？ ヒルダにこっぴどくしかられるわ。

ジョン どうしてヒルダはバジルをまつわりつかせておくんだろう？ バジルを恋

のとりこにしていることを知るべきだ。

メイベル 多分、バジルが一年前に趣味の悪さを示したことを証明して見せたいのよ。

若い男に愛情を抱いている時に、その男が去って誰かほかの人と結婚する

のは結構しゃくなことですよ。

ジョン それなら、ヒルダは正々堂々とやっていないと思うから、僕からそう言う

よ。

メイベル ヒルダにひどくしかられるわよ。

ジョン 構うもんか……。いいかい、僕がヒルダと話ができるように、君が話をそ

らすんだ。

メイベル どうやって？

ジョン 「あっさり」と分からない。創造力を働かせろよ。

メイベル 「ほかの連中の方に向かって行きながら」ヒルダ、ジョンがお茶を飲みた

がってるの。

ヒルダ 「前に進み出て来ながら」一体どうして自分で勝手に飲めないの？

ジョン 生まれつきの謙虚さが邪魔するんです。

ヒルダ あなたの全く新しい習性ね。

ヒルダは座ってジョンのためにお茶を注ぐ。ジョンは無言でヒルダを見る。

ヒルダ リッチモンドで昼食を食べたんですって？

ジョン ええ……。それからパットニーに行っただけです。

ヒルダ 大変な一日だったわね。

ジョン 「カップを手に取りながら」ねえ、お義姉さん——馬鹿なまねをして笑い者になるつもりじゃありませんよね？

ヒルダ 「目を見開きながら」あら、そんなつもりないわ。どうして？

ジョン バジルが一年ほど前に結婚したということが、お義姉さんの記憶から消え

てしまったんじゃないかと思ったものですか。

ヒルダ 「ぎよっとして」一体どういうこと？ 「呼びかけて」メイベル。

ジョン　ちよつと待ってください……。ちよつとお話ししてもいいでしょ？
ヒルダ　退屈させられるんじゃないかしら。

ジョン　「機嫌よく」絶対そんなことはありませんから……。バジルはかなり頻繁にここに来るんじゃないですか？

ヒルダ　余計なお世話だということが分かってないんじゃないの、ジョン。
ジョン　パットニーにいるあのかわいそうな女性にとっては随分つらいことだと思いませんか？

ヒルダ　「軽蔑気味に」わたしは彼女に会いに行きました。下品で見栄っ張りだと思ったわ。彼女には何の興味もわかないんじゃないかと思うの。

ジョン　「優しく」彼女は下品かもしれませんが、彼女の愛は心の中の音楽みたいなものだと感じていました。そんなふうに見えるようになるなんて、随分苦しんだんだとは思いませんか？

ヒルダ　「間を置いて、突然声も身振りも変えながら」わたしが苦しまなかったとも思うの、ジョン？　わたしはすごく不幸なのよ。
ジョン　本当はバジルが好きなんですか？

ヒルダ　「激情でかすれた小さな声で」いいえ、好きなんてもものじゃない。バジルが踏んだ地面そのものだって崇拜するくらいよ。

ジョン　「真剣に」それなら、一番いいと思う通りにするべきです……。あなたは世界で最も危険なゲームをやっているんです。人間の心をもてあそんでいるんですから……。さようなら。

ヒルダ　「ジョンの手を取りながら」さようなら、ジョン。わたしが薄情だったからと言って、怒ってないわよね……。バジルの奥さんのことを話してくれて嬉しいわ。もう、どうすればいいか分かるわ。
ジョン　メイベル。

メイベル　「前に進み出て来ながら」はい、本当にもう帰らなければ。二時間もかわいいい赤ちゃんを見ないんですもの。

ヒルダ　「メイベルの両手を取りながら」さようなら、幸せさん。あなたにはかわいいい赤ちゃんと愛する夫がいるわ。これ以上何を望めるの？

メイベル　「軽薄に」車が欲しいわ。
ヒルダ　「メイベルにキスしながら」さようなら、あなた。

メイベルとジョンは出て行く。

ブラックリー　わたしはこの部屋が好きですよ、マレー夫人。「もうお帰りの時間ですよ」なんて言ってるみたいなき客間もあります、この部屋はそう見えませんか。

ヒルダ　「落ち着きを取り戻しながら」そう見えるのは家具じゃないかしら。家具を変えようかと考えているところなの。

ブラックリー　「にっこりして」やれやれ、それじゃほとんどわたしが長居して嫌われたみたいですね。

ヒルダ 「陽気に」あなたが帰りたくなるまでは帰らせることができないのを知らなければ、あんなこと言わなかったのに。

ブラックリー 「立ち上がりながら」あなたはわたしのことをよくご存じだ。でも、本当にえらく遅くなってしまうた。

ヒルダ 昨日の夜、芝居で一緒だった金髪の魅力的な人が誰なのか教えてもらうまでは、帰っちゃいけないわ。

ブラックリー おやまあ、焼きもち焼き屋さん！

ヒルダ 「笑いながら」そんな馬鹿なこと言わないで。でも、あの人の金髪は染めてあるのを知りたいだろうと思ってるね。

バジルはヒルダが自分に注意を払わないことにいささかいらいらしながら本のページに目を通している。

ブラックリー もちろん、あれは染めてありました。そこがいいところなんです。どんな女性でも自然に金髪にすることができます。信用できない点では青や緑にするのと同じですがね。

ヒルダ わたしはずっと紫にしたいと思ってただけけど。

ブラックリー 女性は人工的であるべきだと思いませんか？ 素敵なフロックを着るのと同様に、頬には紅を、鼻には白粉をつけるのが女性の義務です。

ヒルダ でも、わたしはひどいフロックを着ている女性をたくさん知ってるわ。

ブラックリー ああ、それは別の人種です。わたしはそういう人種は存在しないものとみなします。

ヒルダ どういうこと？

ブラックリー 世界には二種類の女性しかいません——鼻に白粉をつける女性とそれ以外の女性です。

ヒルダ それで、よければ、それ以外というのはどういう人なの？

ブラックリー わたしはこの問題をそれほど念入りに調べた訳ではありませんが、職業で言えば聖職者の娘だと理解しています。

ブラックリーはヒルダと握手する。

ヒルダ 来てくださってありがとうございます。

ブラックリー 「バジルに会釈しながら」さようなら……。またすぐ来てもいいですか？

ヒルダ 「素早くブラックリーを見ながら」今さっきのは本気だったの、それともわたしのことを笑ってたの？

ブラックリー わたしの人生であれほど本気だったことはありません。

ヒルダ それなら、やっぱり木曜日は家で昼食を食べるかもしれないわ。

ブラックリー とうもろこしがとう。さようなら。

ブラックリーはバジルに会釈して出て行く。ヒルダはにっこり笑ってバジルを見る。

ヒルダ そんなに面白い本なの？

バジル 「本を下に置きながら」あの男は帰らないんじゃないかと思いました。

ヒルダ 「笑いながら」彼も同じことを思ったんじゃないかしら。

バジル 「不機嫌そうに」何て馬鹿な奴だ！ どうしてあなたは我慢できるんですか？

ヒルダ わたしはむしろ愛情を感じているの。彼が言うことをすべてまともに受け取っている訳じゃないけど。それに、若い人は愚かで当然だし。

バジル それほど若いという印象は受けませんでした。

ヒルダ 彼はまだ四十よ、かわいそうに——それに、わたしはそれより若い売出し中の青年と知り合ったことがないの。

バジル 随分頭の禿げた若者だ。

ヒルダ 「面白がって」どうして彼が嫌いなのか不思議だわ！

バジル 「嫉妬の目で見ながら、冷たく」彼はちゃんとした家に入るのを許されていないと思ってました。

ヒルダ 「目を見開きながら」ここには来てるわ、ケントさん。

バジル 「機嫌が悪いのを抑えられずに」この二十年のスキヤンダルに彼が全部かわっていたのを知らないんですか？

ヒルダ 「バジルが嫉妬しているだけだと分かって、上機嫌で」世間にはご近所にゴシップを提供する人たちがいるに違いないわね。

バジル 僕の知ったことではありません。こんなふうにあなたに話す権利もありません。

ヒルダ どうしてそうするのかしら？

バジル 「ほとんど怒っているみたいに」あなたを愛してるからですよ。

ちよっと間がある。

ヒルダ 「にっこりして、皮肉っぽく」もうお茶はいらないの、ケントさん？

バジル 「ヒルダに近寄って行き、熱っぽく真剣な感じで話す」あなたは知らないんだ、僕が何に苦しんでいたか。あなたは知らないんだ、僕の生活がどんなに地獄だか……。僕はここに来ないように必死に努力しました。結婚した時、昔からの友達とは全部手を切ると誓ったのに……。結婚して、あなたを愛していることに気がつきました。

ヒルダ そんなふうには話すなら、聞く訳にはいかないわ。

バジル 僕に帰ってほしいんですか？

ヒルダはしばらくの間答えず、興奮して行ったり来たりする。最後に立ち止まり、バジルに面と向かう。

ヒルダ わたしがブラックリーさんに木曜日に来るように言うのが聞こえてたかしら？

バジル ええ。

ヒルダ 彼の妻になってくれと言われている。そして、木曜日には返事をするのよ。

バジル ヒルダ！

ヒルダ 「真剣に」わたしをそれに追いやったのはあなたなのよ。

バジル ヒルダ、彼に何て言うつもりなの？

ヒルダ 分からないけど——ひよつとすると、「イエス」かな？

バジル ああ、ヒルダ、ヒルダ、彼を好きじゃないんでしょ？

ヒルダ 「肩をすくめながら」彼はわたしを楽しくさせてくれるわ。多分、一緒にうまくやっていけるでしょうね。

バジル 「いきり立って」ああ、そんなことではいけない。あなたは自分がやろうとしていることが分かっていない。僕は——あなたは僕を愛してると思っていたのに。

ヒルダ わたしがブラックリーさんと結婚するのはあなたを愛してるからよ。

バジル ああ、そんなの馬鹿げてる。そんなことさせません。あなたは僕たち両方を完全に不幸しようとしている。僕たちの幸せを犠牲にはさせません。ああ、ヒルダ、僕はあなたを愛しているんです。あなたなしでは生きていけない。最初は、あなたに会うのを我慢しました。よくあなたの家の玄関を通り過ぎて窓を見上げたものです。玄関がまるで僕を待っているように思えました。そして、よく通りの突き当たりで振り返ったものです。

ヒルダ ああ、よく中に入ってもう一度あなたに会いたいとどれだけ思ったものか！ たった一度でもあなたに会えば乗り越えられると思いましたが、結局はどうしようもなかった。僕はいくじなしです。僕を軽蔑しますか？

ヒルダ 「ほとんど囁き声で」分からないわ。

バジル あなたが親切だから、また来ずにはいられなかった。害にはならないと思いました。

ヒルダ あなたが不幸に見えたものだから。

バジル もちろん僕は不幸でした。何か月も家に帰るのが怖かった。歩いていて家が見えるともう少しで気分が悪くなるところでした。戦争で死ぬことを僕がどれだけ強く望んだか、あなたは知らないんだ。僕はもうやっていけない。

ヒルダ でも、やらなければ。それがあなたの義務ですもの。

バジル ああ、義務と名誉はもうたくさんだ。節操はこの一年ですっかり使い果たしました。

ヒルダ そんなこと言わないで、バジル。

バジル 結局のところ、僕自身の責任です。自分自身で招いたことですから、責任を負わなければなりません……。でも、僕にはその力がないし、妻を愛していません。

ヒルダ それなら、それを奥さんに気づかせないで。親切に、優しく、寛大にしてあげて。

バジル 何週間も、何か月も、何年も、毎日毎日親切に優しく寛大になんてできない。

ヒルダ あなたは勇敢な人だと思ってた。あなたが臆病者だったら、勳章なんかもらえなかったはずよ。

バジル ああ、ヒルダ、戦闘のさなかに命を賭けるのは難しいことではありません。それならできます——でも、これには僕が持っている以上の強さが必要です。僕には耐えられっこありません。

ヒルダ 「優しく」でも、よくなつていくでしょう。あなたたちがお互いに慣れてもっと理解し合っていけば。

バジル 僕たちはあまりにも違いすぎます。よくなつていくなんてあり得ない。今までと同じにさえやっていくことはできません。

ヒルダ でも、やってみて——わたしのためにやってみてちょうだい。それがどういふことか、あなたは分かっている。彼女が言うこと、彼女がやることすべてが僕のひどく苛立たせるんです。僕は我慢しようと思

ます。歯をくいしばって彼女に対して怒らないようにするんです。時には、どうしようもなく、絶対に言わないでおきたいことを言ってしまう。彼女は僕を引きずり下ろすんです。僕は彼女と同じくらい下品で柄が悪くなつていきます。

ヒルダ どうして奥さんのことをそんなふうに見えるの？

バジル 彼女がどんな人間か僕が自分で認めるまでにはたくさんのことを経験したはずだと思いませんか？ 僕は一生彼女に鎖でつながれているんです。そして、将来をのぞき込むと——彼女が母親みたいに下品でだらしないがみえみえに、僕自身は卑屈で墮落して見下げ果てた状態になっているのが見えます。そういう女はそういう男との争いに疲れることは決していないし、男の方は負けるに決まっています。男はそういう女と結婚すると、女を自分の地位まで持ち上げようとします。愚かなことだ！ 女の方こそ、男を自分の地位まで引きずり下ろすんです。

ヒルダ 「ひどく動揺して、椅子から立ち上がりながら」あなたには幸せになつてもらいたいわ。

バジル 「ヒルダの方に向かって行きながら」ヒルダ！

ヒルダ 駄目よ——やめて……。お願い！

バジル あなたがいなかったら、僕は生きてこれなかった。あなたに会えるというだけで、僕はやっていくだけの勇気を奮い起こしてきたんです。ここに来る度に、あなたへの愛が強くなりました。

ヒルダ ああ、どうして来たの？

バジル どうしようもなかったんです。毒になるのは分かっていますが、僕にはその毒が必要でした。あなたに一目見てもらうために僕は全霊を捧げます。

ヒルダ 少しでもわたしを好きなら、勇敢な男らしく義務を果たして——わたしにあなたを尊敬させて。

バジル 僕を愛してると言ってください、ヒルダ。

ヒルダ 「取り乱して」あなたはわたしたちの友情を不可能なものにしようとしているのよ。わたしがここであなたを迎えることをできなくしようとしているのが分からないの？

バジル 僕にはどうしようもないんだ。

ヒルダ わたしは二度とあなたに会うべきじゃなかった。あなたが来ても害はないと思つてたし、わたしは——あなたを失うことが本当に耐えられなかったからだけだ。

バジル たとえあなたに二度と会えなくても、今こそあなたを愛してると言わない訳にいきません。僕はあなたを苦しめておいて気がつきませんでした。でも、こころの底からあなたを愛しているんです、ヒルダ。一日中あなたのことを思い、夜は夢見ています。あなたをこの両腕に抱いてキスしたい。あなたの唇に、あなたの美しい髪に、あなたの両手にキスしたい。僕の全霊はあなたのものです、ヒルダ。

バジルはまたヒルダのところに向かって行き、両腕に抱く。

ヒルダ ああ、駄目、帰って。お願いだから、すぐ帰って。耐えられない。

バジル ヒルダ、僕はあなたなしでは生きていけない。

ヒルダ わたしを哀れんでちょうだい。わたしがどんなに弱いか、分からないの？

ああ、神様、助けて！

バジル あなたは僕を愛してないんですか？

ヒルダ 「心の底から」わたしだってあなたを愛してるわ。でも、愛してるからこそ、あなたには義務を果たしてほしいの。

バジル 僕の義務は幸せになることだ。愛し合えるところに行こう——イギリスを離れて、愛が罪深くも見苦しくもない国へ。

ヒルダ ああ、バジル、ちゃんとしましょう。わたしと同じくらい——あなたを愛してる奥さんのことも考えて。奥さんにとっては、あなたがすべてなのよ。そんなひどい扱いをしちゃいけないわ。

ヒルダがハンカチを目に当てると、バジルはヒルダの手を優しく取り解く。

バジル 泣かないで、ヒルダ。耐えられない。

ヒルダ 「打ちひしがれた口調で」あのかわいそうな人にそんなひどいことをしたら、わたしたちは二度と自分を尊敬できなくなるのが分からないの？ 嘆き悲しむ彼女がずっとわたしたちの間に存在するのよ。そんなの耐えられ

ない。わたしを哀れんでちょうだい——ちよつとでもわたしを愛してるのなら。

バジル 「声を震わせながら」ヒルダ、そんなの難しすぎる。あなたを捨てることはできない。

ヒルダ そうしなければいけないわ。そうでしょ、わたしたちの義務を果たす方がいいのよ。わたしのために、あなた、奥さんのところへ戻って、わたしを愛することは悟らせないようにして。わたしたちの方が奥さんより強いんだから、わたしたちが自分を犠牲にすべきだわ。

バジルは頭を両手にもたせかけて深くため息をつく。しばらくの間、二人は黙っている。最後に、バジルはもう一つため息をついて立ち上がる。

バジル 何が正しくて、何が間違っているのか、もう僕には分からない。すっかり混乱しているみたいだ。訳が分からない。すごく辛い。

ヒルダ 「声をからして」わたしだって辛いよ、バジル。

バジル 「悲嘆にくれて」じゃあ、さようなら。多分、あなたが正しいんだろう。そして、多分、僕はあなたを不幸にしようとしているだけなんだろう。さようなら、あなた。

ヒルダ

バジルはかがんでヒルダの両手にキスする。ヒルダはすすり泣きをこらえる。バジルはゆっくりとドアのところまで行き、ヒルダに背を向ける。するとその時、ヒルダは耐えきれずにうめき声を上げる。

ヒルダ バジル。行かないで。

バジル 「喜びのあまり叫んで」ああ！ ヒルダ。

バジルは激情してヒルダを両腕に抱き締める。

ヒルダ ああ、耐えられない。あなたを失いたくない、バジル、わたしを愛してると言って。

バジル 「喜びのあまり気が狂ったように」もちろんだよ。僕は心の底からあなたを愛している。

ヒルダ あなたが幸せだったのなら、わたしも我慢できたのに。

バジル もう僕たちを引き離せるものは何もないんだ、ヒルダ。あなたは永遠に僕のものだ。

ヒルダ 神様、お助けください！ わたしは何とということをしてしまったのかしら？

バジル 僕たちが魂を失うとしても、それがどうだと言うの？ 僕たちは全世界を手に入れたんだ。

ヒルダ ああ、バジル、わたしはあなたの愛が欲しいわ。ものすごく欲しいの。
バジル 僕と一緒に来てくれるかい、ヒルダ？ 僕はあなたをその地のみんなが愛の

ことしか口にしない国に連れて行くことができる——そして、そこでは愛と若さと美しさしか問題にならないんだ。

ヒルダ わたしたちがずっと一緒にいられるところへ行きましょう。わたしたちにはほんの僅かな時間しかないわ。つかめるだけの幸せをつかみましょう。

バジル 「もう一度ヒルダにキスしながら」ヒルダ。

ヒルダ ああ、バジル、バジル……。 「飛び退く」待つて！

執事が入って来る。

執事 ケント夫人です。

執事が名前を伝えると、ジェニーが慌ただしく入って来る。

バジル ジェニー！

ジェニー 捕まえたわ。

バジル 「礼儀ただしくしようとしながら——ヒルダに向かって」僕の妻をご存じ
たと思うけど。

ジェニー 「怒った大きな声で」ああ、そうね、あたしは知ってるわ。紹介してくれ
なくてもいいのよ。あたしは夫を迎えに来たんだから。

バジル ジェニー、何を言ってるんだ？

ジェニー ああ、あなた方上流社会のみせかけは必要ないの。遠慮なく話すためにこ
こに来たんだから。

バジル 「ヒルダに向かって」二人だけにしてもらってもいいですか？

ジェニー 「ヒルダにも向かって、激情して」いいえ、あたしはあなたに話したいの。

あなたはあたしから夫を奪おうとしている。この人はあたしの夫なのよ。

バジル おとなしくしてくれ、ジェニー。気でも違ったのか？ マーレー夫人、お
願いですから、二人にさせてください。妻はあなたを侮辱するでしょうか
ら。

ジェニー あなたはこの人のことは考えるけど、あたしのこととは考えてくれない。あ
たしがどんなに苦しもうが気にもかけないんだから。

バジル 「ジェニーの腕を取りながら」帰ろう、ジェニー。

ジェニー 「バジルを振り解きながら」帰らないわ。あなたはあたしをこの人に会わ
せるのが怖いのよ。

ヒルダ 「良心の呵責を感じ、蒼白になって震えながら」奥さんに話しをさせて。

ジェニー 「脅すようにヒルダに近寄って行きながら」あなたはあたしから夫を盗も
うとしている。ああ、あなたは……。 「強烈さに足りる言葉に詰まる。」

ヒルダ わたしはあなたを不幸にしたくはありません、ケント夫人。

ジェニー お上品な言葉であたしを丸め込もうとしても無理よ。そういうのはうんざり。あたしは率直に話したいの。

バジル 「ヒルダに向かって」どうか行ってください。あなたがいても無駄です。

ジェニー 「なお一層激しく」あんたはあたしから夫を盗もうとしてる。悪い女よ。

ヒルダ 「ほとんど囁き声で」お望みなら、ご主人には二度と会わないと約束します。

ジェニー 「怒ってさげすみながら」約束してくれるのは大いに結構だわ。でも、あなたの言うことは一言だって信じない。上流社会の女がどんなものか分かってる。シティーですっかり分かっているんだから。

バジル 「ヒルダに向かって」何としても二人だけにしてください。

バジルがドアを開けると、ヒルダはバジルから目をそらしながら出て行く。

ジェニー 「猛然と」あたしはあの女が怖い。でも、あの女にはあたしに立ち向かう勇氣なんかない。

バジル 「ヒルダが出て行く時に」申し訳ない。

ジェニー あんたはあの女に申し訳ないのね。

バジル 「ジェニーに向かって」うん、そうだ。ここに来てこんなふうになる舞うのはどういうつもりなんだ？

ジェニー あたしはどうとうあんたを捕まえた……。この嘘つき！ 汚い嘘つき！ チャンスリー・レーンに行くと言ったくせに。

バジル チャンスリー・レーンに行ったよ。

ジェニー ええ、知ってるわ——五分だけね。単なる言い訳だった。あんたは真っ直ぐここに来てよかったのよ。

バジル 「怒って」よくもまあ、僕の跡をつけられるものだ。

ジェニー あたしにはあんたの跡をつけるぐらいの権利はあるわ。

バジル 「自分を抑えられずに」ここで何が望みなんだ？

ジェニー あんたが欲しいの。何が起きているか、あたしに見当がつかないでも思っているの？ あんたがハリウエルと一緒に家に入るのを見た。その後、彼が奥さんと出て来た。それから、もう一人の男が出て来て、あんたがあの女と二人だけだと思っただわ。

バジル 「鋭く」どうして分かったんだ？

ジェニー 執事に一ポンド金貨をやって、教えてもらったのよ。

バジル 「軽蔑を表す言葉を探しながら」ああ、この……このゲス女が！ 君ならそれぐらいのことはやりかねないと思うべきだった。

ジェニー それで、あんたを待ったけど、あんたは出て来なかった。それで、ついにそれ以上我慢できなくなったのよ。

バジル それなら、もう君は用が済んだ訳だ。

ジェニーはテーブルの上に立ててあるバジルの写真を見つめる。

ジェニー 「写真を指さしながら」何であの女があんたの写真を持ってるの？
バジル 結婚する前に、僕がマレー夫人にあげたんだ。
ジェニー あの女にあそこに置いとく権利はないわ。

ジェニーは写真を手に取って乱暴に床に投げつける。

バジル ジェニー、何をするんだ？

ジェニーは猛然と乱暴にかかとを写真に突き刺す。

ジェニー 「言葉に嫌悪感をにじませながら」ああ、あの女が憎い。あの女が憎いわ。
バジル 「自分を抑えようと努力しながら」君のせいで僕は本当に気が狂いそうだ。
君は僕に人生を後悔するようなことを言わせようとする。頼むから、帰ってくれ。

ジェニー あんたが一緒に来るまで、あたしは帰らないわ。

バジル 「逆上して」僕は残ることにする。

ジェニー どういうことよ？

バジル いいか、今日までは、僕は君に知られてはいけないようなことをやったことも言ったこともないと、神の前で君に誓える。僕を信じるか？

ジェニー あんたがあの子に恋してないなんて信じないわ。

バジル もう信じてくれなんて頼まない。

ジェニー 何ですって！

バジル 言っただろ、今日までは僕は君に対して完璧に貞節だったって。神に誓って、今まで僕は義務を果たそうと努力してきた。君を幸せにするためにできることは全部やってきた。そして、君を愛そうと全力でもがいてきた。言いたいことがあるんなら、全部言いなさいよ。聞くのは怖くないわ。

ジェニー 僕は君を騙したくはない。何があつたか君が知るのが一番だ。

ジェニー 「小馬鹿にしたように」さて次はもう一つ大嘘をつくのね。

バジル 今日の午後、僕はヒルダに愛してると言った……。そして、ヒルダも僕を愛してる。

ジェニー 「怒りの叫び声を上げて」何ですって！

ジェニーは傘でバジルの顔を叩くが、バジルはその一撃をかわしてジェニーから傘を奪い取って放り投げる。

バジル 自業自得だ。君が僕をあまりにも不幸にしたからだ。

ジェニーはあえいでうろたえ、自分を抑えようとしながら、どうすることもできずに立っている。

バジル もう終わりだ。僕たちが送ってきた生活には無理があった。僕は自分の力を超えることをやろうとしたんだ。僕は出て行くよ。もう君と一緒に暮らすことはできないし、その気もない。

ジェニー 「自分自身とバジルが言うことに驚いて」バジル、それは本気なの？

バジル 僕は何か月も戦ってきた。そして、もう負けたんだ。

ジェニー あんたがあたしを重要な存在にしたのよ。あたしはあんたを離さないわ。

バジル 「苦々しく」これ以上何を望むんだ？ 僕の人生を何から何まで滅茶苦茶にしただけじゃ足りないのか？

ジェニー 「声を枯らして」あんたはあたしを愛してないの？

バジル 愛したことなんか無い。

ジェニー どうしてあたしと結婚したのよ？

バジル 君がそうさせたからだ。

ジェニー 「囁き声で」あたしを愛したことないの——最初の頃さえも？

バジル ないね。

ジェニー バジル！

バジル その気持ちを抑えておくにはもう遅すぎる。その気持ちを君に話して終わりにするしかない。君は何か月もの間、喧嘩で片をつけてきた——今度は僕の番だ。

ジェニー 「バジルに近寄って行き、その首に自分の腕を巻きつけながら」でも、あたしはあんたを愛してるのよ、バジル。あんたがあたしを愛するようにさせるわ。

バジル 「ジェニーから逃れながら」触らないでくれ！

ジェニー 「絶望の身振りをして」あたしを嫌ってるのは本当なのね。

バジル 頼むから、ジェニー、おしまいにしよう。済まない。君に冷たくしたくないんだ。でも、君だって分かっていたに違いない——僕が君を好きでないことは。ごまかして続けて、そのふりをして、自分を完全にみじめにして何の役に立つんだ？

ジェニー ええ、分かってたわ。でも、信じようとしなかったの。あたしがあんたの肩に手を置くと、あんたがかるうじて震えを抑えるのが分かった。そして、たまにあんたにキスすると、あたしを押しつけられないように全力を尽くしているのが分かったわ。

バジル ジェニー、僕が君を愛してなくてもしょうがない。しょうがないんだ——僕が誰かほかの人を愛しても。

ジェニー 「ぼう然としておびえながら」あんたはどうするつもりなの？

バジル 僕は出て行くよ。

ジェニー どこへ？

バジル 知るもんか。

ドアでノックの音がする。

バジル お入り。

執事がメモを持って入って来てバジルに渡す。

執事 マーレー夫人がこのメモをお渡しするようにとのことです、旦那様。

バジル 「メモを手に取りながら」ありがとう。

執事が出て行くと、バジルはメモを開いて読んでから目を上げてジエニーを見る。ジエニーは不安そうにバジルを見つめている。

バジル 「読み上げる」 「奥様にお伝えいただいても差し支えありません。わたしはブラックリーさんと結婚する決心をしました。あなたとはもう二度とお会いしません。」

ジエニー どういうこと？

バジル 「苦々しく」 はっきりしてないか？ 誰かが彼女に結婚を申し込んで、彼女は受け入れるんだ。

ジエニー でも、あの女はあんたを愛してるって、あんたは言ったわ。

バジルは肩をすくめて答えない。ジエニーは哀願するようにバジルに近寄って行く。

ジエニー ああ、バジル、もしそれが本当なら、あたしにもう一度チャンスをちょうだい。あの女はあたしほどあんたを愛してないんだから。あたしはわがままで喧嘩っ早くて無理な要求ばかりしてきたけど、ずっとあんたを愛してたわ。ああ、あたしを捨てないで。あんたにあたしを好きにさせられるかどうか、もう一度試させてちょうだい。

バジル 「目を落としながら、声をからして」 済まない。もう遅すぎる。

ジエニー 「絶望して」 ああ、神様、あたしはどうすればいいの？ たとえあの女が誰かほかの人と結婚しても、あんたは世界中の誰よりもあの女が好きなの？

バジル 「囁き声で」 そうだ。

ジエニー あの女はたとえさっきの男と結婚しても、やっぱりあんたを愛するんだわ。あんたたち二人の間にあたしの入り込む余地はないのね。あたしは首にかけた召使みたいに出て行くしかないのね……。ああ、神様！ ああ、神様！ 何の因果でこんなに苦しまなければならぬのかしら？

バジル 「ジエニーのいかんともしがたい苦悩に心を動かされて」 君をそんなに不幸にしても済まない。

ジェニー ああ、同情はよして。あたしが今あんたに同情してもらいたいと思っ
の？

バジル 君は帰った方がいいよ、ジェニー。

ジェニー 嫌よ。もうあたしは必要ないって、あんたが言ったんだから。あたしは好
きなようにするわ。

バジル 「ジェニーをちょっと見てためらってから肩をすくめる。」じゃあ、さよ
うなら。

バジルが出て行くと、ジェニーは目で追いながら、けだるように片
手で額を覆う。

ジェニー 「ため息をついて」あの人は喜んで行ってしまった……。 「わずかにすす
り泣く。」あたしの入り込む余地はないのね。

ジェニーは自分が踏みつぶした写真を床から拾い上げて見る。そし
て、両手に顔を埋めながらへたり込んでわっと泣き崩れる。

第三幕終わり

第四幕

翌朝。

第二幕と同じパットニーにあるバジルの家の客間。バジルがテーブルに着いて、両手で頭を抱えている。疲れ切っているように見える。顔は真つ青で、目の下に大きな黒い隈がある。髪は乱れている。テーブルの上にピストルがある。

ドアでノックの音がする。

バジル 「目も上げずに」お入り。

ファニーが入ってくる。

ファニー 「控え目にそっと」ご入用のものがないか見にまいりました、旦那様。

バジル 「ゆっくりと目を上げてファニーを見ながら、元気がないかすれた声で」何もいらない。

ファニー 窓をお開けしましょうか、旦那様？ 素敵な朝ですよ。

バジル いや、僕は寒い。暖炉に石炭を追加してくれ。

ファニー お茶を一杯いかがですか？ 一晩中お休みにならなかった後は、何かお召し上がりになった方がよろしいですよ。

バジル 何も欲しくない……。構わないで、おとなしくしてきてくれ。

ファニーが暖炉に石炭を追加する間、バジルはけだるそうに見つめる。

バジル お前が電報を送ってからどれくらい経つんだ？

ファニー 郵便局が開く時に持って行きました。

バジル 今、何時だ？

ファニー ええと、旦那様、そろそろ九時半でございます。

バジル 全く、時間の経つのが何て遅いんだ。夜が終わらないんじゃないかと思つた……。ああ、神様、僕はどうすればいいんでしょう？

ファニー 濃いお茶をお作りします。元氣の出るものをお取りにならないと——どうなっても知りませんよ。

バジル 分かった、早く作ってくれ。喉が渴いた……。それに、すごく寒い。

表玄関の呼び鈴が聞こえる。

バジル 「跳び上がった」玄関に誰か来たぞ、ファニー。早く。

ファニーが出て行くと、バジルは部屋のドアのところまでついて行く。

バジル
ファニー、ハリウェルさん以外は上がらせないでくれ。僕は誰とも会えないって言うんだ。「しばらくの間、心配そうに待つ。」君なのか、ジョン？
ジョン
「部屋の外から」そうだよ。
バジル
「自分に向かって」助かった！

ジョンが入って来る。

バジル
来てくれないんじゃないかと思ってた。すぐに来てほしかったのに。
ジョン
電報をもらってすぐに出て来たんだよ。
バジル
あの子が郵便局に行ってから何時間も経った気がする。
ジョン
どうしたんだ？
バジル
「声を枯らして」分からないのか？ 電報に書いたつもりだけど。
ジョン
非常に困ったことになったとしか書いてなかったぞ。
バジル
君は新聞で見えるだろうと思ってたんだ。
ジョン
一体どういうことだ？ 僕は新聞を見てない。奥さんはどこにいるんだ？
バジル
「間を置いて、ほとんど囁き声で」彼女は死んだ。
ジョン
「びっくり仰天して」何てことだ！
バジル
「苛立って」僕をそんな目で見ないでくれ。簡単な話だろ？ 分からないか？
ジョン
でも、昨日は元気だった。
バジル
「ぼうっとして」そうだ。昨日は元気だった。
ジョン
頼むから、どういうことか教えてくれ、バジル。
バジル
彼女は死んだ……。そして、昨日は元気だった。

ジョンは理解できない。非常に心を痛めていて、何と言ったらいいか分からずにいる。

バジル
僕が彼女を殺したんだ——自分の手で絞め殺したみたいに確実にね。
ジョン
どういうことだ？ 本当は死んでないんだ！
バジル
「もだえ苦しみながら」昨日の夜、川に身を投げたんだ。
ジョン
何て恐ろしい！
バジル
「何て恐ろしい」よりもっと何か言うことはないのか？ 僕は気が狂うんじゃないかと思う。
ジョン
でも、僕には分からない。彼女はなぜそんなことしたんだ？
バジル
ああ、昨日僕たちは大喧嘩をしたんだ……。君が来る前にね。
ジョン
知ってる。

バジル

その後、彼女は僕の跡をつけて来た……君の義理のお姉さんの家までね。そして、僕に近づいて来てもう一騒ぎしたんだ。その時、僕は度を失ってしまった。怒り狂って、何を言ったか分からない。正気の沙汰じゃなかったんだ。僕は彼女にもう君とは何の関係も持たないと言った……。ああ、僕は耐えられない。耐えられっこないよ。

バジルは泣き崩れて両手で顔を隠し、すすり泣く。

ジョン

さあ、バジル——しっかりするんだ。

バジル

「絶望的な様子で見上げながら」今でも彼女の声が聞こえる。目の表情が見える。彼女はもう一度チャンスをくれと言ったが、僕は断った。彼女が訴えた時の言い方を聞いてとても哀れに思ったけど、僕は正気の沙汰じゃなくてそれを感じる事ができなかったんだ。

ファニーがお茶の入ったカップを持って入って来ると、バジルは黙ってそれを手に取って飲む。

ファニー

「ジョンに向かって」旦那様は一晩中一睡もされてないんです……。その点では、わたしも同じですけど。

ジョンはうなずくが答えない。ファニーはエプロンで目を拭きながら部屋を出て行く。

バジル

ああ、僕が言ったことを言わなかったことにできたら何でも上げるよ。僕は今までずっと自分を抑えてきたけど、昨日は——抑えられなかった。

ジョン

それで？

バジル

僕は九時近くまでここに戻って来なかったんだけど、ジェニーはちょうど出掛けたところだとメイドに言われた。母親のところに帰ったんだと思った。

ジョン

それで？

バジル

そのすぐ後に、巡査がやって来て、川へ来てくれと言ったんだ。事故があったと言われた……。彼女は死んでいた。彼女が引き船道をやって来て身を投げるのを見た人がいたんだ。

ジョン

彼女は今どこにいるんだ？

バジル

「ドアの一つを指さしながら」あの中だ。

ジョン

僕と一緒に入ってくれないか？

バジル

独りで行ってくれよ、ジョン。僕にはその勇気がない。彼女を見るのが怖いんだ。彼女の顔を見るのは耐えられない……。僕が彼女を殺したんだ——自分の手で絞め殺すのと同じくらい確実にね。一晩中あのドアを見てい

たら、一度音が聞こえたと思った。僕に殺されたと言って非難しに来るんだと思った。

ジョンがドアのところまで行って開けると、バジルは顔をそむける。ジョンが入ってドアを閉めると、バジルは激しい苦痛から半狂乱のようになり、怯えた目でドアを凝視する。バジルは自分を抑えようとす。しばらくして、ジョンが静かに戻って来る。

バジル

「囁くように」彼女はどんなふうだった？

ジョン

怖いことは何もないよ、バジル。眠っているみたいだった。

バジル

「両手を握り締めながら」でも、ぞっとするような青白さだ……。

ジョン

「真剣に」彼女は生きていたこれまでよりも幸せだ。

バジルは深くため息をつく。

ジョン

「ピストルを見ながら」どうしてこんなものが？

バジル

「自分を軽蔑するよううめき声を上げて」夜、自殺しようとしたんだ。

ジョン

ええっ！

ジョンはカートリッジを取り出して、ピストルをポケットに入れる。

バジル

「苦々しく」ああ、心配しないで、僕にはその勇気がないから……。僕は生きていくのが怖かった。僕が自殺すれば、彼女が死んだことの償いになるだろうと思っただ。僕は川へ行って、引き船道を同じ場所まで歩いた——でも、できなかった。水がどす黒く冷たくて冷酷に見えた。それなのに、彼女は簡単にやつてのけた。ずっとやつて来て身を投げたんだ。「間」

それから、僕は戻って来て、自分を撃とうと思った。

ジョン

そんなことして、誰かのためになったと思うか？

バジル

僕は自分を軽蔑した。生きている権利がないと感じて、引き金を引く方が簡単だと思った……。自殺するのは卑怯だと人は言うけど、どれだけ勇氣のいることか知らないんだ。僕はその苦しみにまっこうから立ち向かうことができなかった——その後、あの世に何があるか分からないし。やっぱり、情け容赦なく復讐する神が存在して、僕たちには測り知れない神の戒律を破ると永遠に罰されるといふのは本当かもしれない。

ジョン

僕を呼んでくれてよかった。君はロンドンに戻って、さしあたり僕のところ泊まった方がいい。

バジル

夜、何があつたと思う？ 僕は寝つけなかった。二度と眠ることができないかと思つた——するとまもなく、椅子でうとうとし始めたんだ。そして気持ちよく眠れた——まるで死んで冷たくなつたジェニーなんかあそこ

に横たわっていないみたいだね。メイドが僕を気の毒がるのは、彼女と同じように僕も眠れない夜を過ごしたと思ってるからなんだ。

外で口論している声が聞こえる。ファニーが入って来る。

ファニー 済みませんが、旦那様、ジェイムズ様です。

バジル 「怒って」僕は会わないよ。

ファニー 帰ろうとなさらないんです。旦那様は具合が悪くてどなたともお会いになつてらっしゃらないと申し上げたんですが。

バジル 僕は会わない。来るだろうとは思ってたが、糞食らえだ！

ジョン でもやっぱり、ここに来る権利はある程度あると思うよ——この状況ではね。何が望みか知っておく方がいいんじゃないか？

バジル ああ、彼は大騒ぎするだろう。殴り倒してやる。僕はもう彼のためにあまりにも苦しんだから。

ジョン 僕に会わせてくれ。検死の時に彼が一悶着起こすことを君が望まないなら。

バジル そのことを考えていたんだ。彼と家族がでっ上げそんな話は分かっている。新聞がそれを捕らえて、誰もが僕をのしるだろう。誰もが僕のせいだと言うだろう。

ジョン 僕が彼と話してもいいかな？ そういうことのすべてから君を助けてやれると思う。

バジル 「肩をすくめながら、苛立って」どうでも好きなようにしてくれ。

ジョン 「ファニーに向かって」お客さんを通してくれ、ファニー。

ファニー はい、旦那様。

ファニーは出て行く。

バジル じゃ、僕は行くよ。

ジョンがうなずくと、バジルはジェニーが横たわっている部屋の隣のドアから出て行く。ジェイムズ・ブッシュが現れる。

ジョン 「いかめしくかつ冷たく」おはよう、ブッシュさん。

ジェイムズ 「攻撃的に」あの男はどこだ？

ジョン 「眉を吊り上げながら」人様の家では帽子を脱ぐのが普通ですよ。

ジェイムズ 俺は、俺は節操のある人間なんだよ。だから、それを示すために被ったままにいるんだ。

ジョン そうですか、それじゃ、そのことについて議論するのはやめましょう。

ジェイムズ 俺はあの男に会いたいんだ。

ジョン 誰のことを言っているのか聞いてもよろしいかな？ 世界には随分たくさん男がいますからね。本当のところ、実に多すぎます。

ジェイムズ あんたが誰なのか、知りたいね？

ジョン 「礼儀正しく」わたくしの名前はハリウエルでございます。光栄にも、ブルームズベリのバジルの下宿でお目にかかりました。

ジェイムズ 「攻撃的に」分かっている。

ジョン 申し訳ありません。お問い合わせかと思つたもので。

ジェイムズ 俺は義理の弟に会いたいと言つてるだろ。

ジョン 無理だと思ひますよ。

ジェイムズ 会うと言つてるんだ。あいつが俺の妹を殺したんだ。あいつは悪党で殺人者だから、面と向かつてそう言つてやるんだ。

ジョン 「皮肉っぽく」彼に聞こえないように気をつけてください。

ジェイムズ 俺はあいつに聞かせたいんだ。あいつなんか怖くない。あいつが俺に触れるのを見てみたいもんだ。「凶暴そうにジョンにじり寄る。」ふん、俺を締め出そうとしたな？ 俺が妹の家に来ちゃいけないと言つて――

商売人みたいに玄関で待たせておいたんだ。全くもう、この仕返しは必ずしてやるからな。すぐに借りは返してやる。ウエストエンドのろくでなしの下劣な集団だよ、あんたたちはみんな。

ジョン ブッシュさん、ここに居る間は言葉遣いを慎むのがいいでしょう――それに、もう少し小さな声で話される方が。

ジェイムズ 「小馬鹿にしたように」誰がそう言つてるんだ？

ジョン 「冷静にジェイムズを見ながら」わたしです。

ジェイムズ 「断固としてというほどもなく」俺をいじめようとするな。

ジョン 「椅子を指さしながら」お座りになりませんか？

ジェイムズ いいや、俺は座らない。ここは紳士が座るような家じゃない。今にあいつに仕返ししてやる。陪審にとんでもない話をしてやるんだ。あいつは、あいつは絞首刑になつて当然なんだからな。

ジョン 起きたしまったことについては、何ともお悔やみの申しようがありません。

ジェイムズ よせ、俺を説き伏せようとするな。

ジョン いえ、ブッシュさん、あなたがわたしに対して怒る理由なんかありませんよ。

ジェイムズ だとしても、俺はあんたのことなんか重要に考えちゃいない、どつちみちな。

ジョン とても残念です。この前お目にかかった時、あなたはとても気立てのいい方だと思ひました。覚えていませんか、一緒に一杯やりに行ったのを？

ジェイムズ 俺はあんたが紳士じゃないとは言わない。

ジョン 「葉巻のケースを取り出しながら」一本いかがですか？

ジェイムズ 「不審そうに」おい、俺を騙そうとしてるんじゃないよな？

ジョン もちろん違います。そんなことは夢にも思つていません。

ジェイムズ 「葉巻を一本手に取りながら」ララナーガだ。

ジョン 「辛辣そうな笑みを浮かべて」百本で九ポンドです。
ジェイムズ ということは、一本一シリング九ペンスだよな？
ジョン 何て計算の早いこと！
ジェイムズ そんな余裕があるなんて、あんたはかなりの金持ちに違いない。
ジョン 「そっけなく」そういうのは尊敬の念を起させませよね？
ジェイムズ それであんたが何を言いたいのかわからない。でも、自慢じゃないが、
いい葉巻は一目見れば分かるんだ。

ジョンが座ると、ジェイムズ・ブッシュも考えもせずにジョンの例に従う。

ジョン 死因審問で一騒ぎすることであんたは何を得られると思いますか？ もちろん、死因審問はあるでしょうが。

ジェイムズ ああ、開かれるのは分かっている。俺は楽しみにしてるんだよ。

ジョン わたしがあなただったら、そんなことは言わなかったでしょう。

ジェイムズ 「ジョンの直前の言葉に込められている意味に全く気づかず——自分の不満で頭がいっぱいで」俺は、俺は我慢していることがあるんだ。

ジョン そうなんですか？

ジェイムズ ああ、あいつは俺にひどい扱いをしたんだ！ 全くごみみたいに扱った。ジェニーのためでなかったら、一分だって我慢できなかっただろう。何と、あいつにとつて俺では不足だったんだ。あいつはよく、まるで俺なんかそこにはいないかのように俺のことを見透かしてた——ああ、今に仕返ししてやるんだ。

ジョン どうするつもりですか？

ジェイムズ 余計なお世話だ。こっぴどくやっつけてやる。

ジョン それであなたに何かいいことがあると思いますか？

ジェイムズ 「跳ぶように立ち上がりながら」ああ。俺は本気で……。

ジョン 「遮って」まあ、座ってください、いい子だから。そして、そのことについてちよっとお話ししましょう。

ジェイムズ 「怒って」あんたは俺を騙そうとしてるんだな。

ジョン 馬鹿な。

ジェイムズ ああ、そうだ、そうなんだ。否定しても無駄だ。あんたなんかガラス板みたいに見透かせる。あんたたちウエストエンドの連中は——何でも知ってると思ってるんだ。

ジョン 請け合いますよ……。

ジェイムズ 「遮って」でも、俺はシティーの訓練を受けてるから、俺が馬鹿ではないことにあんたが何でも好きなものを賭けても大丈夫だ。

ジョン わたしたちは二人とも世慣れた人間ですよね、ブッシュさん。わたしのたつての願いを聞いてくれませんか——友人として？

ジェイムズ 「不審そうに」どんな願いかによるな。

ジョン 二、三分、おとなしくわたしの話を聞いてもらうだけです。

ジェイムズ それぐらい構わんよ。

ジョン それでは、実を言うと——バジルはここを出て行くつもりで、家具と家を処分したがついています。いくら価値があると思いますか、競売人としては？

ジェイムズ 「見回しながら」いくら価値があるかといくらで売れるかは全く別の問題だ。

ジョン もちろんです。でも、あなたみたいに頭のいい方なら……。

ジェイムズ それじゃ、騙しつこなした。言っとくが、その手は食わないから……。

皿とリネンも含めるのか？

ジョン 一切合財です。

ジェイムズ そうだな、うまく売れたとして——仕事がよく分かってる人間の手にかければ……。

ジョン あなたが売るとすれば、例えばですが？

ジェイムズ 百ポンドで売れるだろう——いや、百五十ポンドで売れるかもしれない。

ジョン それなら、誰にとつても不足のある贈り物にはなりませんよね？

ジェイムズ ああ。その点は同感だ。

ジョン とところで、バジルはこの家の中身を全部あなたのお母さんと妹さんに差し上げようと考えているんです。

ジェイムズ 本音を言うと、あいつもそれぐらいのことはするべきだ。

ジョン 条件は、もちろん、死因審問で何も言わないことです。

ジェイムズ 「せせら笑って」笑わせるな。母親に家中の家具をくれるだけで俺を口止めできると思ってるのか？

ジョン わたしにはあなたのような私利私欲のない高尚な考えはありませんでした、ブッシュユさん。今こそ、あなたの考えを受け継ぎます。

ジェイムズ 「鋭く」それはどういう意味だ？

ジョン あなたはバジルから大金を借りているらしいですね。返せるんですか？

ジェイムズ いいや。

ジョン それに、最後の職場ではあなたの取引のことで何か争い事があったらしいですね。

ジェイムズ そんなの嘘っぱちだ。

ジョン そうかもしれません。でも、要するに、あなたが騒ぎ立てれば、そのことがあなたにとって非常にやっかいなことになりかねないんじゃないですか。内輪の恥をさらすととなると——大抵の場合、双方によくないことがたくさんもたらされますよ。

ジェイムズ 俺は構わんよ。仕返しするつもりなんだから。あの男に恨みを示すことさえできれば——結果は甘んじて受け入れるつもりだ。

ジョン それとは別に——あなたが死因審問で騒ぎ立てなければ、五十ポンド差し上げましょう。

ジェイムズ 「憤然として跳び上がりながら」俺を買収する気か？

ジョン 「冷静に」そうです。

ジェイムズ あんたに教えようとした通り、俺は紳士だし、おまけにイギリス人だ。そして、俺はそれを誇りに思ってる。あんたは恥を知るべきだ。俺は今まで誰にも買収されたことなんかないぞ。

ジョン 「関心なさそうに」そうでもなければ、あなたは間違いないく受け取ったでしょうね。

ジェイムズ 俺は半分以上あんたを殴り倒す気になってるんだ。

ジョン 「かすかに笑みを浮かべて」まあまあ、ブッシュュさん、馬鹿なこと言わないで。おとなしくしてた方がいいと思いますよ。

ジェイムズ 「小馬鹿にしたように」俺にとって五十ポンドが何だって言うんだ？

ジョン 「鋭い目つきで見ても」誰が五十ポンドなんて言いましたか？

ジェイムズ あんただろ。

ジョン あなたは思い違いをしているに違いありません。百五十ポンドですよ。

ジェイムズ ええっ！「最初は驚くが、その後、金額が心にしみ込むと、疑い始める。」そうなるって話は全く別だな。

ジョン あなたに嘘をついてくれとは言いません。何にしても、あなたみたいない無意味な——世慣れた方が、取るに足らない恨みごとを身を委ねるのは無意味です。それに、わたしたちはどんな中傷もされたくありません。そんなことにならなくてもいいから、わたしたちと同様、あなたにとっても不愉快なことになるでしょう。

ジェイムズ 「決めかねて」妹がヒステリックだったことは否定しない。あいつが俺を紳士らしく扱ってさえくれてたら、何も言うことはなかったんだ。

ジョン それで？

ジェイムズ 「狡猾そうな鋭い目つきでジョンを見て」二百ポンドにしてくれ、それなら決まりだ。

ジョン 「頑として」いいえ。あなたは百五十ポンド受け取ればいいんです。そうしなければ破滅です。

ジェイムズ そうか、それなら、それをくれ。

ジョン 「ポケットから小切手を取り出しながら」今五十ポンド渡して、残りは死因審問が終わってからにしましょう。

ジェイムズ 「ある意味感心して」あんたは、あんたは抜け目のない野蠻人だ。

ジョンは小切手を書いて、ジェイムズ・ブッシュュに渡す。

ジェイムズ 領収書を出そうか？ 俺は実業家だからな。

ジョン もちろん、分かっていますよ。でも、必要ありません。お母さんと妹さんには話すんですか？

ジェイムズ 心配するな。俺は紳士だから、友達を裏切ったりしない。

ジョン もうあなたにさようならを言おうと思います。バジルが誰とも会えないのは分かっていただけです。

ジェイムズ 分かるよ。じゃあな。

ジェイムズが手を差し出し、ジョンは重々しく握手する。

ジョン さようなら。

ファニーが一つのドアから入って来ると、ジェイムズ・ブッシュはもう一つのドアから出て行く。

ファニー 厄介払いができてせいせいしましたね。

ジョン いや、ファニー、この世に悪党がいなかったら、正直者にとって人生は本当にすごく難しいものになるだろうね。

ファニーは出て行き、ジョンはドアのところまで行って呼ぶ。

ジョン バジル——彼は帰った……。君はどこにいるんだ？

ジェニーの遺体が横たわっている部屋からバジルが出て来る。

ジョン そこにいるとは思わなかった。

彼女は僕を許してくれるだろうか？

ジョン 僕が君だったら、あまりくよくよしないよ、なあバジル。

僕がどれだけ自分を軽蔑しているか、君が分かってさえくれたら！

ジョン まあまあ、バジル、君は努力しなければいけない……。

バジル 僕は君に最悪のことを話していません。僕はすごく卑劣な人間だと思う。一つの考えが一晩中頭を離れなかった。そして、それを追い払うことができないでいる。ほかのどんな考えよりもよくない考えだ。実に恥ずべき考えだ。

ジョン どういうことだ？

バジル ああ、見下げ果てた考えだ。しかも、僕には強烈過ぎて……。考えない訳にはいかないんだ。僕は——自由なんだと。

ジョン 自由だって？

バジル 彼女を追悼することに反している。でも、刑務所の扉が開く時がどういものか、君には分かるまい。「話しながら、だんだん興奮してくる。」僕は死にたくない。生きていたいし、両手で人生をつかんで楽しみたい。幸せを求める欲望がすごくあるんだ。窓を開けて、日の光を入れよう。「窓まで行ってさっさと開ける。」生きていくだけでも素晴らしいことだ。新たに出発できると、どうして考えちゃいけないんだ？ 過去のことを捨てて、やり直せるのに。僕は幸せになるんだ。神様だって許してください。そう考えない訳にはいかないんだ。僕は自由だ。僕はひどい失敗をしたが、

苦しんだ。僕がどんなに苦しんだか、最善を尽くそうとどれだけ懸命に努力したか、神様だつてご存じだ。全部が全部、僕のせいではなかった。この世界で僕たちが物事を行ったり考えたりする時は、他人がそれをよしとしてきたからそうしている。僕たちには自分独自の道を行くチャンスはないんだ。僕たちはほかのみんなの先入観や道徳観に縛られている。どうか、自由になろう。あれやこれややる時は、他人がそうすべきだと考えるからではなく、自分がそうしたいから、そうしなければならぬからやるようにしよう。「突然ジョンの前に立ち止まる。」何か言ったらどうだ？君の見つめ方は、まるで僕のことをたわ言を言う気違いだと思っっているみたいだ！

ジョン

何を言ったらいいのかわからなくてね。

バジル

そうか、君はショックで開いた口がふさがらないんだろうな。僕は見せかけを続けない訳にはいかない。最後までちゃんと役を演じない訳にはいかないんだ。君だったら僕がやったことをやる勇気はなかっただろう。それにもかかわらず、僕が失敗したから、君は道徳的に高尚な高い所から僕を見下してもいいと思っっているんだ。

ジョン

「真剣に」僕は人が星に上ろうとする時、どれだけ遠くまで落ちるだろうかと考えていた。

バジル

僕は世界に純金を与えたが、通貨はただのタカラガイの貝殻だ。僕は理想を掲げたが、人々は僕を嘲笑った。この世ではほかの連中と一緒にいけば桶の中のた打ち回らなければならない……。僕に分かる唯一の教訓は、悪党みたいに振る舞って——百人の内の九十九人がするようにね——ジエニーを破滅させれば、僕は幸せで満足して順調だったろうということだ。そして、彼女も、多分、死ななかつただろう……。僕が義務を果たして紳士らしく、名誉を重んじる男らしく振る舞ったからこそ、こんな不幸なことが起きたんだ。

ジョン

「バジルをそつと見ながら」僕はもつと別の言い方で言うべきだと思う。物事の普通の味方に逆らつて進むためには、強くて自分に自信を持っていなければならぬということだ。そして、もしそうでないなら、恐らく、危険を冒さずにただ凡人と同じ安全な昔からの道を進む方がいいということだ。それでは浮き浮きしないし、華やかでもなく、むしろ退屈だ。でも、極めて安全なんだ。

バジルは最後の言葉をほとんど聞かずに、ひたすら外の音に聴き入っている。

バジル

あれは何だ？ 車の音が聞こえたみたいだが。

ジョン

「ちよつと驚いて」誰か来るのか？

バジル

電報を送ったんだ——君に宛てたのと同時にヒルダにもね。

ジョン

もう送ったのか？

バジル 「興奮して」彼女は来ると思うか？

ジョン 分らんね。「玄関のドアで呼び鈴が鳴る。」

バジル 「窓まで走って行き」玄関に誰かいるぞ。

ジョン 多分、彼女も君が自由になったと思ったんだろう。

バジル 「極めて情熱的に」ああ、彼女が僕を愛してくれて、僕も——彼女を熱愛している。神様、お許しください。仕方がないことです。

ファニーが入ってくる。

ファニー 済みませんが、旦那様、検死官が来られました。

終わり